

耶穌降生千八百八十四年
米國聖書會

舊約
聖書
撒母耳後書

明治十七年

日本橫濱印行

02-KI

海老澤文庫

撒母耳後書

第二日サウルの死し後ダビデアマレタ人を擧てかへりチクラ
 第三日およびて一個の人其衣を覆
 土をむりて陳營より即ちサウルの所より來りダビデの
 地ふして拜せりニダビデカレひけるハイスラエルの陣營より
 來れるやるはダビデひけるハ事いハん請ふ我ふつけ
 りロダビデかれにひけるハ事いハん請ふ我ふつけ
 民戦ふ敗れて逃ハ民あ得く作て死りまた
 コナメンも死リエダビデ其あのれふつぐる少者ハ
 汝いハにしてサウルと其子コナタンの死たるをま
 つぐる少者ハひけるハ我はからずもギルボア山に
 見しにサウル其槍に倚りよりをりて戰車と騎兵うれせ
 らんとせり七かれうしろおふりむきて我を見我をよびたれ



バ我ふたへて我ふよありといふハかれ我ふ汝の御なるといひ
 けきを我のよふみたへて我のアマレク人ありといふたれまた
 我のいひけるの且ガ身いたく撃を請ふ我うへおれりて我をころ
 せわガ生命をほわれの中にまつたれバありと我すなりの
 れれ上りのりてわれを殺したり其の我のよ色既お作て生るこど
 をえざるを去りたきバありまうして我の首にわりし屍どろの
 腕おわりし劍を取りてこきをわガ主お携へきたれり是に
 てダビデおのれの衣を執てみれを裂けりまた彼どもに
 も皆しうせり彼等サウルのためまた其子ヨナタンためまた
 エホバの民のためイストラエルの家ためお哭きおあしめて
 まで食を斷り其の彼ら劍にたふれたれをあり十三ダビデのよ色
 告し少者にいひける汝の何處の者あるやよ色みたへけるは我
 の他國の人するのちアマレク人なりと告ダビデかれにいひける

の汝るん予手をのバしてエホバの膏ろよぎし者をふろそこを
 與さりしやとまダビデ一人の少者をよびていひける近よりて
 めれをころせとするのちよ色をうちけきバ死り其ダビデのれに
 いひたるの汝の血の汝の首に歸せよ其の汝口づから我エホバの
 あふらろよぎ志者をふろせりといひて已おひらひて証をたつれ
 をありとダビデ悲歌をもてサウルと其子ヨナタンを吊ふとダビ
 デ命じてよ色をユダの旗ををしへしむ即ち弓の歌是あり是のヤ
 ッル書お記さるまイストラエルよ汝の榮耀の汝の崇邱に懸さる鳴
 呼勇士の仆れたるゝな此事をガに告るなうれアレケロン
 邑に傳るるうれ恐くのベリシテ人の女等喜ん恐くの割禮を受さ
 る者の女等樂を舞のん三ギルボアの山よ願ひ汝の上お雨露降る
 んどあらされ亦供物の田園もあらさき其の彼處に勇士の干察ら
 るればあり即ちサウルの干膏を沃がすして彼處お察らる三殺せ

し者の血をばますしてロナタシの弓の退るす勇士の脂を食すし
 てサウルは劍の空しく歸らずサウルとロナタシの愛らしく樂げ
 ふして生死とも不離さず二人の誓よりも捷く獅子よりも強かり
 き言イスラエルは女等よサウルのために哀けサウルの練き衣を
 もて汝等を華麗な紐ひ金の飾を汝等の衣に著たり嗚呼勇士の
 戦の中お作たるうるヨナタン汝の果跡お殺されぬ兄弟ヨナタ
 シよ我汝のために悲慟む汝は大に我お樂き者ありき汝の我をい
 つくしめる愛の尋常あらず婦の愛も勝りたり嗚呼勇士の作
 たるある戦の具の失たるある

第二節 此のちダビデエホバお問ていひける我エダレひとつ
 の邑おのぼるべきやエホバおれおひたまひけるをばばれ、ダビ
 デいひける何處おのぼるべきやエホバおひたまひけるをば
 ばるべしとニダビデすなはち彼處おのぼれりうの二人の妻エ

ズレル人アヒノアムおよびカルメル人ナバルは妻なりシアピガ
 ルもどもおのぼれりニダビデ其おのれどもにありし従者と其
 家族をこしく將のぼりければ皆へブロンは諸邑にすめりロ
 時おエダの人々きたり彼處にてダビデお膏をらぎてエダの家
 の王となせり人々ダビデおつけてサウルを葬りしにヤベシ
 ギレアデの人なりといひけむニダビデ使者をヤベシギレアデ
 の人おおくりてこゝにいひける汝らこれ厚意を汝らの王サウ
 ルにあらんしてこれを葬りたればねがはぬ汝らエホバより福
 祉をえよねがはぬはエホバ恩寵と眞實を汝等おえめしたまへ
 汝らおの事をなしたるおより我亦汝ら此恩恵をえめすあり
 されば汝ら手をつよくして勇ましくおむ汝らの王サウルの死た
 り又エダの家我に膏をらぎて我をおれらの王となしたれば
 りとハ愛おサウルの軍の長チルの子アブナサウルの子イッホ

セテを取りてこれをマハナイムふもちびきとたりユギレアテと
 アレユリ人どエズレルどエフライムどベニヤミンどイスラエル
 の衆の王どあせりサウルの子イシボセテのイスラエルの王ど
 ありし時四十歳にして二年のあひだ位ありしダニエルの家
 びテあしたダヘリダビデダヘブロンにありてイスラエルの家
 王たりし日數の七年と六ヶ月ありきテルの子アブテルおよ
 びサウルの子あるイシボセテの臣僕等マハナイムを出てギベオ
 ンに至れりセルヤの子コアブとダビデの臣僕もいでゆけり彼
 らギベオンの池の傍にて出會一方の池の此時に一方の池の彼
 畔に坐す者アブテルコアブひひけるのいさ少者をして起て我
 らのまへに獻れしめんコアブひひけるのいさ少者にして起て我
 子イシボセテを屬するベニヤミンの人其數十二人およびダビデ
 の臣僕十二人走て前を去るの其敵手の首を執へて劍を其敵手

の脊に刺し斯して彼等俱に斃れたり是故其處はヘルカタハツ
 リム(利劍の地)と稱らる即ちギベオンにありて此日戰甚た烈しく
 してアブテルとイスラエルの人々ダビデの臣僕のまへに取るナ
 其處にセルヤの三人の子コアブ、アヒシヤイ、アサヘル居たりしダ
 アサヘルは疾足あるふと野にをる獵のおどくありきアサヘル
 アブテルの後を追ひけるダ行ふ右左におまがり少アブテルの後を
 したふアブテル後を顧みていふ汝の右左に轉向て少者の
 と答ふニアブテル前れひひけるの汝の右左に轉向て少者の
 一人を擡へて其戎服を取れと然るアサヘルアブテルをおふふと
 を罷て外に向ふを背せずニアブテルふたふびアサヘルあひ汝
 我を追ふとをやめて外に向へ我あんず汝を地に撃ち作すべけん
 や然せば我いかでり且汝を汝の兄コアブあむくべけんと然
 どもかれ外にむりふふとをいひによりアブテル擡は後歸をも

てかれの眼を刺しければ槍の背後ふいてたりある其處あたふ
 れて立時死す斯しむをアサヘルの仆れて死るところに來る者
 の皆たちとまれり言されどアブダアビシヤイのアブテルの後
 を追きたりしがギベオン野の遺傍にギアの前あるアンマの
 山あいたる時日暮ぬニベニヤモンの子孫アブテルあしたダ
 て集まり一隊とありていびどつれ山の頂にたてり爰アブテル
 ヲアブをよびていひけるは刀劍豈永久に得るばさんや汝其終り
 あり怨恨を結ぶにいたるを去らざるや汝何時まで民に其兄弟を
 追ふるをやめてくへるふと命ぜざるやニヨアブいひけるは
 神は活く若し汝が言出さざりしならんば民ののく其兄弟を
 追はずして今晨のうちおさりのさしならんぞ云くてヨアブ嗚咽を
 吹きければ民信たちとまりて再イスラエルは後を追はずまたか
 さねて戦ひざりきニアブテルと其從者終夜アラバを經ゆきてヨ

ルダンを渡りヒテロンを通りてマハナイムにいたれりニヨアブ
 アブテルを追ふことをやめて歸り民をこどく集めたるニダ
 ビアの臣僕十九人とアサヘル缺てをらざりきニされどダビ
 臣僕ニベニヤモンとアブテルの從者三百六十人を撃ち殺せり
 人々アサヘルを取りあげてベテレヘムある其父の墓に葬るコ
 アブと其從者の終夜ゆきて黎明ハプロンにいたれり
 アサヘルの家とダビ家の間の戦争久しかりしがダビ
 アの益強くなりサウルの家はまそく弱くるれりニハプロンに
 てダビダに男子等生る其首出の子ニアムノンといひてエズレ
 人アヒノアムより生るニ其次ハキレアブといひてカルタル人ナ
 ルの妻ありシアヒガルより生る第三ハアブサロムといひてゲ
 コルの王タルマイの女子マアカの子あり第四ハアドニヤとい
 ひてハキテの子あり第五ハシバテヤといひてアヒタルは子あり

第六のイタレヤムといひてダビデの妻エグラの子あり是等の
 子へブロンハてダビデに生るハサウルの家とダビデの家の間ハ
 戦争ありし間アブテルの堅クサウルの家に荷擔リ七鬮ハサウル
 一人の妻を有り其名をリツバといフアヤの女なり愛ハイレボセ
 テアブテルハいひけるハ汝何ケワガ父の妻に通じたるヤハアブ
 テル甚しくイレボセテ言を怒りていひけるハ我今日汝の父サウ
 ルの家とろの兄弟とろの朋友に厚意をあらはし汝をダビデの手
 ハヒたさざるハ汝今日婦人は遊を擧て我を責む我ハ犬の首な
 らんヤユダにくどする者ならんヤハ神アブテルハ斯ふしまたあ
 さねて斯ふしたまへエホバのダビデに誓ひたまひしおどく
 我かさに然あすへしハ即ち國をサウルの家より移しダビデ
 の位をダンよりベエルセラハいたるまでイスラエルとユダの上
 ハたてんハイレボセテアブテルを恐きたきバウさねて一言も

之おみたふるをえざりきサアブテルおのれの代に使者をダビデ
 ハつゝのりしていひけるハ此地の謀の所有なるヤ又いひける
 ハ汝我と契約を爲セ我力を汝ハ添へてイスラエルを悉く汝ハ歸
 せ志めんサダビデいひけるハ善し我汝と契約を爲さん但し我一
 比事を汝ハ索む即ち汝來りてワガ面を觀る時先づサウルの女エ
 カルを擱きたらききを我面を觀るを得じとサダビデ使者をサウ
 ルの子イレボセテ遣ハしていひけるハ是ガベリレテ人の陽皮
 一百を以て取たるワガ妻ミカルを我ハ交すへしサイレボセテ人
 をつりのりしてあれを其夫ライシの子ハルテより取去ルバ其夫
 哭つゝ歩みて其後ハ夫たガハて俱にバホリムにいたりしガアブ
 テルハれハ歸り往けといひけるハ汝前よりダビデを汝ら
 スラエルの長老等と語りていひけるハ汝ら前よりダビデを汝ら
 の王となさんふとを求め居たり夫されバ今あれをあすへし其の

エホバダビデに付て語りて我且ダ僕ダビデの手を以てわが民イ
 スラエルをベリセラ人の手よりまたるの語の敵れ手より救ひい
 ださんといひたまひたれをありと云ふアブテル亦ベニヤミンの耳
 に語を伝へておしてアブテル自らイスラエルにおよびベニヤミンの
 全家の善いおもふ所をへブロンにてダビデは耳を告げんとて往
 りてすなわちアブテル二十人を去たがへてへブロンにゆきてダ
 ビアの洞をいたりたればダビデアアブテルと其またがへる從者の
 ため酒宴を設けたりニアブテルダビデアいひける我起てゆ
 きイスラエルをみどしく且が主王の所を集めて彼等汝と夫
 約を立しめ汝をして心け望む所の者をことしく治むるにいた
 らぬめんど是においてダビデアアブテルを歸してられ安んずる
 三時おダビデアの臣僕およびコアアブ人の國を侵して歸り大なる掠
 取物を攜へきたれり然とアブテルのダビデアとよむにへブロンに

はをらざりき其のダビデアを歸してりれ安んずる去りたはバ
 り三コアアブおよびどもにありし軍兵皆あへりきたりしとき人々
 コアアブに告ていひけるはテルの子アブテル王の所にきたりしが
 王の返してかかれ安んずるにされりと言コアアブ王に語りていひけ
 る汝何を爲したるやアブテル汝の所ふきたりしに汝何を故あり
 れを返して去ゆらめしや汝テルの子アブテルが汝を誰りさ
 んできたり汝の出入を知りまた汝のすべて爲す所を知んため
 お來りしを知ると言あててコアアブダビデアの所より出來り使者を
 つりいしてアブテルを遣しめたれを使者セラの井よりゆきてを將
 返さざりさきとダビデアの知ざりきニアブテルへブロンに返りし
 をコアアブ彼と密に語らんとてりれを門の内お引きゆき其處あて
 るの腹を刺てみ色を殺し己の兄弟アサヘルの血をむくいたり云
 其後ダビデア聞いていひける我我我國のテルの子アブテルの血に

つきてエホバのまへへ永く罪あるまどを去り其罪はコアブの首
 と其父の全家に歸せよねダグの口コアブの家々の白濁を疾もれ
 る癩病人の杖に倚もれり剣も作るものや食物に乏しき者や絶ゆ
 ることあらざれとコアブどろけ弟アビシヤイのアブチルを懲
 したるのうれがギベオンにて戦陣のうちむれのれれ兄弟アサへ
 ルをふるせしむれりミダビデオアブおよびれのれとともあ
 る民にいひけるの汝らの衣服を裂き麻の衣を着てアブチルのた
 めに哀哭くべしとダビデア王其棺を去たがふ三人衆アブチルをへ
 ブロンお葬れり王聲をわけてアブチルは墓を哭き又民みる哭け
 り王アブチルの爲お悲の歌を作りて云くアブチル如何にして
 思ある人は如くお死けん言汝れ手縛もあらず汝の足の錠も
 繋れざりしものを嗚呼汝の悪人のためお作る人のおとくおたふ
 れたり斯て民皆再びおられたためお哭けり民みな日のあるうち

にダビデアおパンを食ひしめんとして來りしおダビデア誓ひていひけ
 るの若し日の没まへお我パンおても何にても味ひなバ神我あ
 くおし又重ねて斯なしたまへと云民を見て之を共目お善しとせ
 り凡て王の爲すところは事の舊民の目お善と見えたり其日民
 すまのちイスラエル皆チルは子アブチルを殺たるの王の所爲にあ
 らざるを知れり王は臣僕をいひけるの今日一人は大將大人
 イスラエルお驚る汝らこそを去らざるや我の裔もよがれし王
 あれども今日尙弱しゼルヤの子等ある此等の人我に制しがた
 しエホバ惡をおみなふ者お其惡を隠ひて報いたまらん
 一サウルは子のアブチルのへブロンおて死たるを聞き去
 かバ其手弱くありてイスラエルを憂へたりニサウルは子隊長
 二人を有てり其一人をバアナといひ一人をレカブといふベニヤ
 ミンの支派あるベロタ人リモンの子等なり其のベロタも亦べ

ニヤツンの中を不潔へらるるをバありエ昔昔ハロア人ギタイムに逃れ
 選がれて今日今日にいたるで彼彼處處不潔人人となりて止止まる止ル止ル止の子子
 ヨナタン子不潔足足の子子一人一人ありエズレルよりサウルとヨナタンの
 事事は報報いたりし時時ハ五五歳歳ありき其其乳乳媼媼ヲ抱きて逃逃れた
 りシ夕夕急急ぎ逃逃る時時其其子子堅堅て跋跋者者どるどるどるど其其名名をメヒボセとい
 フエハロア人人リンモンの子子レカブとハアナゆきて日日の熱熱き頃頃イ
 シボセは家家にいたるにイシボセは午午睡睡し居居たり大らきら喪を
 取取らんといひて家家中中にいりきたりかれの腹腹を刺刺り流してレ
 カブと其其兄弟兄弟バアナ逃げさりぬ七彼彼等等が家家にいりしどきイシボ
 セは其其寢寢室室にありて床床の上上に寝たりかれら即ちこれをうちこ
 ろしみれを献りて其其首首級級をとり終終夜夜アラハは道をゆきてハイシ
 ボセは首首級級をへブロンハダビアの計に攜へいたりて王王にいひ
 けるハ汝汝は生命命を求めたる汝は敵サウルの子子イシボセは首首を

視視よエホバ今日我我主主ある王の仇仇をサウルと其其裔裔お報報いたまへり
 とハダビアヘハロア人人リンモンの子子レカブと其其兄弟兄弟バアナに答答へ
 ていひけるハわが生命命を請の艱難難の中中に救救ひたまひしエホ
 バは生生くハ我我は嘗嘗て人人の我我に告告て視視よサウルの死死りと言言ひて自
 ら我我に善善き事事を傳傳ふる者者と思思ひをりしを執執てこ色色をチチララグに
 殺殺し其其消息消息に報報いたりと况况や惡惡人人の義義人人を其其家家の床床上上に殺殺し
 たるをやされバ我我彼彼の血血をながせる罪を汝汝らお報報い汝らをふけ
 地地より絶絶ぎるハけんやとダビア少少者者に命命じけれバ少少者者かきら
 を殺殺して其其手手足足を切切離離しハブロンの池池の上上に懸懸たり又イシボセ
 アは首首を取取りてハブロンにあるアブチルの墓墓お葬葬れり
 一一爰爰にイスラエルの支派派咸咸くハブロンおきたりダビアハ
 いたりていひけるハ視視よ我我等等ハ汝汝は骨骨肉肉ありニ前前おサウルが我
 等等の王王たりし時時も汝汝はイスラエルを率率めて出出入入する者者ありき

志かしてエホバ汝に汝わが民イスラエルを救養めん汝イスラエ
 ルの君長どならんといひたすへりとエ斯くイスラエルの長老皆
 ヘブロンふきたり王ふ詣りけれバダビヤ王ヘブロンおてエホバ
 のまへおるきらと契約をたてたり彼らするはちダビヤお膏を
 以てイスラエルの王とあすヨダビヤの王とありし時三十歳おして
 四十年の間位に在きエ即ちヘブロンおてユダを治むること七年
 と六箇月またエルサレムおてイスラエルとユダを全く治むるこ
 と三十三年ありテ茲に王其從者どもおエルサレムに往き其地
 の居民エブス人を攻んとすエブス人ダビヤにありたりていひける
 は汝此お入ること能ひざるべし反て盲者汝を退はらんとい
 是彼らダビヤ此に入らんあたらずと思へるあり然るにダビヤ
 オンは要害を取り是即ちダビヤの城邑ありハダビヤ其日いひけ
 るの雖も水道にいたりてエブス人を撃ちまたダビヤの心の

惡める盲者と盲者を撃つ者の首どみし長とあさんといはによりて
 人々盲者と盲者の家お入るべならずといひあせりトダビヤ其要
 害お住て之をダビヤは城邑と名けたりまたダビヤエモ(城塞)より
 内は四方お建築をなせりトかくてダビヤのますト大いお成り
 也且萬軍の副エホバこれと共にいませりトソロの王ヒラム使
 者をダビヤお遣りして槍および木匠と石工をおくきり彼らダビ
 ヤのために家を建つタダビヤエホバのたたく已をたてよイスラ
 エルの王となしたまへるを曉りまたエホバの其民イスラエルの
 ためお其國を興したまひしを曉きりトダビヤヘブロンより來り
 し後エルサレムの中よりまた妾と妻を納たれば男子女子またダ
 ビヤに生る者エルサレムにて彼お生れたる者の名のりくのごと
 しシヤンマ、シヨバブナタン、ソロモン、エイブハル、エリシユア、手ベ
 グ、ヤヒア、エリシヤマ、エリアダ、エリパレラトを愛に膏を沃いでダ

ヒデをイスラエルの王と爲し事へりシテ人々聞えければベリシ
 テ人皆ダビデを獲んとて上るダビデ聞て要害を下れり夫レベリシ
 テ人驟りてレバインに谷あり布き備へたり夫レダビデエホバに即て
 いひたるに我ベリシテ人にむゐひて上るべきや汝かれらわが
 手付したまふやエホバダビデいひたまひけるに上れ我必ら
 手ベリシテ人を汝の手あわたさん夫レダビデバアルベラロムに至
 りおれら其所を擧ていひけるにエホバ水の破壊り出ることく
 我敵をわが前破壊りたまへりと是故に其所の名をバアルベラ
 ロム(破壊の處)と呼ぶと彼處に彼等其偶像を遣たまふダビデと其
 從者もれを取わけたり三ベリシテ人再び上りてレバインの谷に
 布き備へたまふダビデエホバ問ふにエホバいひたまひける
 は上るべからず彼等の後にまゐりベカの方より彼等を襲へ
 言汝ベカの樹の上を進行の音を聞ばそゐりち突出づべし其時お

のエホバ汝のまへいでよベリシテ人の軍を撃たまふべければ
 ありとダビデエホバのおのれに命じたまひしごとくあしベリ
 シテ人を撃てケバよりカセルふいたる

第三章

一ダビデ再びイスラエルの選抜の兵士三萬人を悉く集む

ニダビデ起ておのれと共おをる民どもにバアルエズダを往て神
 の匱を其處より昇上らんとす其匱のケルビムの上にお坐したまふ
 萬軍はエホバの名をもて呼るをそあはち神の匱を新しき車に載
 せて山にあるアヒナダブの家より昇いだせりロアヒナダブの子
 ウザとアヒオ神の匱を載たる其新車を御しアヒオと匱のまへお
 仰けりニダビデおよびイスラエルの全家琴と瑟と鼓と鈴と鏡鉢
 をもちて力を極め詠を歌ひてエホバのまへお躍り舞れり夫レ等ダ
 ナコンの禾場ふいたれる時ウザ手を神の匱お付してふれを扶へ
 たり其の牛振たればなりエホバウザおむりひて怒りを發し其

誤謬のためお彼を其處に擧ちたまひければ彼ろてお神の匱の傍
 お死ねりハエホバウザを擧ちたまひしおよりてダビデ怒り其處
 をベレツウザ(ウザ)と叫び呼り其名今日おいたる。其日ダビデエホ
 バを畏さていひけるハエホバは匱いかで我所おいたるべけんや
 どナダビデエホバの匱を己お移してダビデの城邑おいらまむる
 を好まず之を轉してガテ人オベデエドムの家おいたらしむ。エホ
 バの匱ガテ人オベデエドムの家お在ること三月ありきエホ
 バオベデエドムと其全家を惡またまふ。エホバ神は匱れたためお
 オベデエドムは家と其所有を皆惡みたまふといふ事ダビデ王お
 聞えければダビデもきて喜樂をもて神の匱をオベデエドムは家
 よりダビデの城邑お昇上せり。エホバの匱を昇者六步行たる時
 ダビデ牛と肥たる者お献たり。ダビデ力を極めてエホバの前お
 踊躍れり時おダビデ布のエホバを着たり。ダビデおよびイ

ストラエをれ全家歡呼と喇叭は聲をもてエホバの匱を昇のぼれり
 去神は匱ダビデの城邑おいらし時サウルの女ミカル意より癡ひ
 てダビデ王のエホバはまへお舞躍るを見其心おダビデを藐視ひ
 人々エホバは匱を昇入てみきをダビデが其爲お張たる天幕は
 中ある其所お置りまうしてダビデ燔祭と酬恩祭をエホバのまへ
 お献げたり。ダビデ燔祭と酬恩祭を献ぐることを終し時萬軍の
 エホバの名を以て民を祝せり。また民の中即ちイスラエルの衆
 庶の中お男おも女おも俱おパン一箇肉一斤乾葡萄酒一塊を分ちあ
 たへたり。斯て民皆おのく其家おかへりぬ。愛おダビデ其家族
 を祝せんとて歸りしかむサウルの女ミカルダビデを出でむ。くへ
 ていひたるハイスラエルの王今日如何お威光ありしや自ら遊蕩
 者の其身を露すがごとく今日其臣僕の婢女はまへお其身を露し
 たまへりと。ダビデミカルおいふ我ハエホバのまへに即ち汝の

父よりもまたその全家よりも我を選きて我をエホバの民イスラ
 エルの首長を命じたまへるエホバのまへへ踊れり我の此より
 も尙鄙ららんまたみづら服しと思はん汝が語る婦女等ども
 もあわりて我の尊榮をえんと是は故にサウルの女ニカルの死ぬ
 る日まで子あらざりき

第七章

一 王其家に住むいたり且エホバ其四方の敵を壊てりれを安ん

ならまめたまひし時ニ王預言者ナタンにいひけるの視よ我の槍
 の家に住む然ども神の匿り幔幕の中ありエナタン王にいひけ
 るのエホバ汝と共在せば往て凡て汝の心あはるとみろを爲せ
 其夜エホバの言ナタンに臨みていひて往てわが僕ダビデに
 言へエホバ斯く言ふ汝わがため我の住むべき家を建んとする
 や我のイスラエルの子孫をエホバトより導き出せし時より今
 日おいたるまで家に住しふどるくして但天幕と幕屋の中お歩み

居たり我イスラエルに子孫と共お凡て歩める處にて汝ら何
 故に我を槍に家を建てるやとわが命じては民イスラエルを牧
 養せしエホバに一人に一言も語りしことあるやハ
 然バ汝わが僕ダビデに斯く言ふべし萬軍のエホバ斯く言ふ我汝
 を牧場より取り羊に隨ふ所より取りてわが民イスラエルの首長
 とおし汝がすべて往くところにて汝と共あり汝の諸の敵を
 汝の前より断さりて地のの上の大なる者の名のおどく汝お大なる
 名を得させたり又我わが民イスラエルのために處を定めて
 りとちを植つけりれらをして自己の處に住て動くことなり
 らしめたりまた悪人昔のおどくまた民イスラエルの上お
 王を立てたる時よりの如くまた之を懼ますみどるるべ
 し我汝の諸の敵をやふりて汝を安んめたり又エホバ汝に
 告ぐエホバ汝のために家をたてん汝の口の漏て汝が汝は父祖

等と共に寝らん時に我汝の身より出る汝は種子を汝は後にたて
 と其國を堅うせん昔彼わが名れたために家を建ん我永く其國の位
 を堅うせん昔我の杖は父とあり彼の父は子とあるべし彼もし
 迷ひて我人の杖は父の子の鞭を以て之を懲さん昔さと我は思
 恵はわが汝のまへより除きしサウルより離したるおどくに彼よ
 り離るよふとあらじ汝の家と汝の國は汝はまへ永く保つ
 べし汝の位は永く堅うせらるべしオナタン凡て是等の言のおど
 くまたすべてふれ異象のおどくダヒアに語りければ大
 ヒア王入りてニホバの前に坐していひける之主ニホバよ我は離
 わが家の何れにか爾此まで我を導きたまひ去や主ニホバよ
 此のな得汝の目に少き事あり汝また僕の家の遙る後の事を語
 りたまへり主ニホバよ是人の法ありニダヒア此上何を汝に言
 ふを得ん其の主ニホバ汝僕を知らたまへばありニ汝の言のため

た汝の心に馳ひて汝此請の大あることを爲し僕に之を告ら末め
 たまふ故お神ニホバよ爾の大いなり其の我らダ凡て耳に聞る
 所お依り汝の如き者あくまた汝の外に祈るなればあり三地の何
 きの國り汝の民イストラエルの如くある其の祈りてかれらを耶
 ひ己の民とあして大なる名を得たまひまた彼らの爲小大ある異
 るべき事を爲したまへばあり即ち汝ダエロブトより贈ひ取たま
 ひし民の前より國々の人と其諸神を逐拂ひたまへり汝は汝は
 民イストラエルをうぎりあく汝の民として汝も定めたまへりエホ
 バよ汝のあれれ神となりたまふまされバ神ニホバよ汝が僕と其
 家につきて語りたまひし言を永く堅うして汝のいひしおどく爲
 たまへりねがとく永久お汝の名を崇めて萬軍のエホバはイス
 ラエルの神ありと曰しめたまへねがのく僕ダヒアの家をして
 汝のまへお堅く立まめたまへり其の萬軍はエホバイストラエルの

神よ汝の耳に示して我汝の家をたてんと言たまひたればあり
 是故に僕此所請を汝爲す道を心の中に得たり主エホバよ汝
 の神あり汝れ言え眞なり汝この恵を僕に語りたまへり主
 僕の家を祝福して汝のまへに永く續くみを得さしめたへ其主
 エホバ汝こゑを語りたまへばありねがひの汝れ祝福によりて
 僕の家も永く祝福を蒙らしめたまへ

第八章

一 此後

此後ダビデベリシヤ人を擧てゐれを服すダビデまたベ
 リシヤ人の手よりメテグアンマをどれりニダビデまたモアブを
 擧ち彼らをして地を伏しめ繩をもてりきらを度れり即ち二條の
 繩をもて死す者を度り一條の繩をもて生しわく者を量度るモア
 ブ人は貢物を納てダビデは臣僕とみれりニダビデまたレホブの
 子あるツバの王ハダブセルグユフラヲ河邊にて其勢を新おせ
 んどて往るを擧り口志かしてダビデ彼より騎兵千七百八十歩兵二

萬人を取りまたダビデ一百の車の馬を存して其餘の車馬は皆其
 筋を切斷りエダマスコのスリア人ツバは王ハダブセルを擧んと
 て來りけきバダビデスリア人二萬二千を殺せりホズクしてダビ
 デダマスコのスリアに代官を置きぬスリア人之貢物を納てダビ
 デの臣僕とみれりエホバダビデを凡て其往く所へて助けたまへ
 りセダビデハダブセルの臣僕等の持る金の桶を奪ひてこれをエ
 ルサレムに攜きたるハダビデ王又ハダブセルの邑ベタとベロタ
 より甚だ多くの銅を取りエ時ハママの王トイダビデガハダブ
 セルの總の軍を擧破りしを聞てトイ其子ヨラムをダビデ王に
 つきはし安否を問ひうつ厥を宣しむ其ハダブセル嘗てトイど
 戦を爲したるハダビデハダブセルとたよひてこれを撃やぶり
 たればありヨラム銀の器と金の器と銅の器を攜へ來りければ
 ダビデ王其攻め伏せたる諸國民れ中より取りて納めたる金銀

と共ともは是こゝろ等らをもエホバはに納なめたりす。即すなはちエドムはよりモアブはより
 アンモンはの子孫はよりベリシタは人はよりアモレクはより受うけたる物ものたよ
 びツバはの王はレホブはの子はハダアゼルはより得えたるは掠さら取物ものとよもふこ
 れを納なめたりす。ダビデは摩押はに於おいてエドムは人は一ま萬ま八は千はを擧あげて歸かへりて名な
 譽なを得えたりす。ダビデアはエドムはに代た官くわんを置おき即すなはちエドムはの全ぜん地ちを領りやう
 有ありて其その往まくどころにて助たすけたまへりす。ダビデアはイスラエルはの全ぜん
 地ちを治さめ其その民たみを公こう道どうと正義せいぎを行なす。セルヤはの子はヨアブはと軍ぐんの長ちやう
 エヒルはの子はヨシヤバはは史し官くわんとアヒトはの子はザドはとアビヤは
 タルはの子はアヒメレクは祭さい司しセラヤは書記き官くわんとエホヤダはの子はベナ
 ヤはケレは人はおよびベレは人はの長ちやうダビデアは子は等はら大だい臣しんなりき
 愛あいふダビデアはいひけるは。サウルはの家はの遺い存ぞんする者もの尙なほある
 や我われヨナタンはの爲ために其その人ひとを思おもひをばとふさんとニサウルはの家はの

候まをなるは。ダバはと名なくる者ものありけし。バカはれをダビデアは許もとに召よきたるは
 王はのれにいひけるは。汝なんぢのダバはあるは。彼かれいふは。僕わが是こゝろありニ王はいひけ
 るは。尙なほサウルはの家はの者ものあるは。我われ其人ひとに神かみの思おもひをばととさんと
 すは。王はいひけるは。ヨナタンはの子は尙なほありは。敢あるは。王はいひけるは。ロバはルに
 いひけるは。其人ひとの何なに處ところをるは。王はいひけるは。ロバはルに
 てアンニエルはの子はマキはルはの家はにをるは。ダビデアは王は人はを遣はりしてロ
 バはルはより即すなはちアンニエルはの子はマキはルはの家はよりはれを歸かへりて
 王はいひけるは。サウルはの子はヨナタンはの子はあるは。メヒボセはテダビデアはの所ところを來きり
 伏ふして拜をせりは。ダビデアはメヒボセはテはよといひは。汝なんぢに答こたへて僕わが此こゝろにありと
 曰いふは。ダビデアはいひけるは。恐おそるは。とるは。我われ必ずかならず汝なんぢの父ちちヨナ
 タンはの爲ために思おもひを汝なんぢに志こゝろめさん。我われ汝なんぢの父ちちサウルはの地ちを悉ことごとく汝なんぢ
 復またすべし。又また汝なんぢの恒とこに我われ席まふはいて食たふべしと。王はいひは。拜をして言ことけ
 るは。僕わが何なにあらべし。汝なんぢ死したるは。夫おののおどき我われを吞のりたまふ。王はサウ

ルの僕ナハを呼てこれにいひけるは凡てサウルとろの家の物ハ
 我皆汝の主人レ子ふあたへたり+汝と汝の子等と汝の僕らと
 ためふ地を耕へして汝の主人の子ふ食ふべき食物を取りきたる
 べし但し汝は主人の子ノヒボセテ恒お我席において食ふべし
 とナハは十五人の子と二十人の僕ありとナハ王ふいひけるは總
 て王わが主レ僕に命じたまひしとおどく僕あすべしとメヒボセテ
 の王の子の一人のごとくダビデアの席にて食へり^{メヒボセテ}
 一人の若き子あり其名をミカといふナハの家に住る者は皆メヒ
 ボセテの僕なりき^{メヒボセテ}ハエルサレムに住きたり其はか
 き恒お王の席あて食ひたればありあれ^{ハエルサレム}の足どもに數たる者
 なり

一 此後アンモンの子孫の王死て其子ハモン之ふ代りて
 父の我に恩恵を前せ
 に即くコダビデア我ナハンの子ハモンに^{ハモン}の父の我に恩恵を前せ

しおどく恩恵を前さんといひてダビデア^{ダビデア}を其父の故ふよりて
 慰めんとして其僕を遣のせりダビデアの僕アンモンの子孫の地にい
 たるおエアンモンの子孫の諸伯其主ハモンふいひけるハダビデア
 慰者を汝遣のしたるふよりて彼汝の父を崇むと汝の目に見ゆ
 るやダビデア此城邑を築ひ^{ダビデア}を採りて^{ハモン}ハダビデアの僕を執へ其
 お遣のせるおあらずや^{ハモン}是おあいてハモンダビデアの僕を執へ其
 驢の半を割り^{ハモン}落し其衣服を中より斷て股までおしてこれを歸せ
 り^{ハモン}人々これをダビデア告げればダビデア人を遣のしてかれらを
 迎へしむ其人^{ハモン}大お駈たればあり^{ハモン}王いふ汝ら驢の長るまで
 エリコお止まりて然るのち歸るべしと^{ハモン}ハモンの子孫自己の
 ダビデアに惡立ち、を見^{ハモン}法かをアンモンの子孫人を遣のしてベテ
 レホブの^{ハモン}スリア人とツバの^{ハモン}スリア人の歩兵二萬人およびマアカ
 の王より一千人トブの人より一萬二千人を雇いれたりセダビデア

聞てヨアブと勇士の惣軍を遣ひせりハアンモンの子孫出て門の
 入口に軍の陣列をふしたりソバビレホブのスリア人およびトブ
 の人とマアカの人の別々野に居りユアブ戦の前後より已に向ふ
 を見てイストラエルの選抜の兵の中を遣えてみれをスリア人
 みて備へてまめ其餘の民をバ其兄弟アビシヤイの手に交してア
 ンモンに子孫を向て備へてまめ其兄弟アビシヤイの手に交してア
 強あらバ汝我を助けよ若アンモンの子孫汝に手剛からバ我ゆき
 て汝をたすけん汝勇士しくみれよ我ら民のためと足れらの神
 比諸邑のため勇士しく爲んねがひのエホバ其目あよしと見ゆ
 るとふるをふしたまへまヨアブ已に其お在る民と共にスリア人
 にむるひて戦んとて近づきけれバスリア人彼のまへより逃たり
 主アンモンの子孫スリア人の逃たるを見て亦自己等もアビシヤ
 イのまへより逃て城邑あいらぬヨアブをならちアンモンに子孫

の所より還りてエルサレムをいたるまスリア人其イストラエルの
 まへお敗れたるを見て俱におひかれり其ハダセル人をしてやりて
 河の兩岸を走るスリア人を將而出して皆ハラムおきたらしむハ
 ダセルの軍の長シロハクを率たり其事ダビデお聞
 文けれバ彼イストラエルを悉く集めてホルダンを涉りてハラムに
 來れりスリア人ダビデに向ひて備へ之と戦ふまスリア人イストラ
 エルのまへより逃けれバダビデスリア兵車の人七百騎兵四萬
 を殺し又其軍の長シロハクを撃てみれを其所お死なめたりまハ
 ダセルの臣ある王等其イストラエルのまへに壞れたるを見てイ
 スラエルと平和をふして之お事へたり斯スリア人の恐きて再
 びアンモンに子孫を助くることをせざりき
 一 年歸りて王等の戦に出る時にたよびてダビデヨアブ
 および自己の臣僕並にイストラエルの全軍を遣ひせり彼等アンモ

りて遣れり。ダビデ其書に書てい、汝らウリヤを烈しき戦の
 先鋒にいだしてあるは、彼より退きて彼をして戦死せしめよ。是
 に在いて、ヨアブ城邑を窺ひてウリヤをバ其勇士の居る所
 に置り、城邑の人出て、ヨアブと戦ひしるを、ダビデの僕の中の數
 人、仆きへ、人ウリヤも死り、夫ヨアブ、僕をつり、にして軍の事を悉
 く、ダビデに告げ、去む。ヨアブ其使者に命じていひけるは、汝が軍
 の事を、皆王お語り終し、とき、王もし怒りを發して、汝お汝らあ
 げ戦へんとて、城邑お近づきしや、汝ら、汝ら、石垣の上より射る
 むとを知らざりしや、ニエルベセテの子、アヒメレクを撃し者、は、誰
 あるや、一人の婦、石垣の上より、磨の上石を殺て、彼を、テベツに殺
 せしに、あら、や、何、汝ら、城垣お近づきしや、と言は、汝言へし、汝
 の僕へ、人ウリヤもまた死り、と、使者おきて、ダビデに、いたり、コ
 アブ、遣り、したる、と、ある、この、ことを、み、と、し、く、告、げ、た、り、と、し、使、者、が、

ビデ、あ、い、ひ、ける、の、敵、我、等、に、手、強、かり、レ、グ、城、外、い、い、で、ま、我、等、あ、い
 たり、し、る、を、我、等、み、れ、お、追、り、て、門、の、入口、に、ま、で、いた、れ、り、と、時、お、射
 手の、者、城、垣、の、上、より、汝、の、僕、を、射、た、り、け、れ、バ、王、の、僕、の、或、者、死、に、亦
 汝、の、僕、へ、テ、人、ウ、リ、ヤ、も、死、り、と、言、ひ、て、ダ、ビ、デ、使、者、に、い、ひ、ける、は、斯、汝、コ
 アブ、お、言、へ、し、此、事、を、覆、ふ、る、ある、を、刀、劍、は、此、を、も、彼、を、皆、同、じ、く、殺
 を、み、り、強、く、城、邑、を、攻、て、戦、ひ、之、を、陥、る、べ、し、と、汝、ら、く、ヨ、ア、ブ、を、同、じ
 ます、べ、し、と、言、ひ、ウ、リ、ヤ、の、妻、其、夫、ウ、リ、ヤ、は、死、た、る、を、聞、て、主、の、た、め、に、悲
 哀、り、ま、其、喪、の、過、し、時、ダ、ビ、デ、人、を、遣、は、し、て、か、れ、を、の、と、け、家、に、召
 いる、彼、す、な、は、ら、の、妻、と、あ、り、て、男、子、を、生、り、但、し、ダ、ビ、デ、の、爲、た、る
 此、事、の、エ、ホ、バ、の、目、お、惡、か、り、き
 一、エ、ホ、バ、ナ、タ、ム、を、ダ、ビ、デ、お、遣、り、し、た、ま、へ、バ、彼、ダ、ビ、デ、お
 至、り、て、み、れ、お、い、ひ、ける、の、一、は、邑、に、二、箇、人、あ、り、一、は、富、て、一、は、貧、乏
 し、其、富、者、の、甚、だ、多、く、の、羊、と、牛、を、有、り、と、さ、れ、と、貧、者、の、唯、自、己、の

買て育てたる一の小き牝羔の外何をも有さりき其牝羔彼およ
 びられの子女どもも生長ちかれの食物を食ひりれの棧に飲み
 また彼の懐に寝て彼に女子のおどくなりき一時一人の旅人
 其富る人の許に來りけるが彼おのれの羊と牛の中を取りて羊の
 れのれお來れる旅人のためお烹を惜みて羊の貧乏人の牝羔を取
 りて之をおのれに來れる人れたためお烹たりエダビテ其人は事
 大お怒りてナタンおいひけるエホバハ生く誠お此ををしたる
 人の死べきなり且彼此事ををししたるお因りまた憐憫まさりし
 およりて其牝羔を四倍おあして償ふべしセナタンダビテおいひ
 ける汝の其人ありイストラエルの神エホバ斯いひたまふ我汝お
 膏を沃いでイストラエルの王とあし我汝をサウルの手より救ひ
 だし汝お汝の主人の家をあたへ汝の主人の諸妻を汝の懐にお
 へまたイストラエルとユダの家を汝お與へたり若し少からば我汝

に種々の物を増くおへしあらん何ぞ汝エホバは言を説視して
 其目のまへお惡をなせしや汝刀劍をもてへテ人ウリヤを殺し其妻
 をとりて汝の妻とあせり即ちアンモンの子孫は劍をもて彼を斬
 殺せり汝我を輕んじてへテ人ウリヤは妻をとり汝は妻とあし
 たるに因て劍何時までも汝は家を離るるまゝなるべしエホ
 バ斯いひたまふ視よ我汝は家の中より汝の上におを起すべし我
 汝は諸妻を汝の目のまへお取て汝の隣人お與へん其人此日たま
 へて汝の諸妻とともお寝ん其汝之密お事ををししたれど我
 のイストラエルの衆はまへ日たまへに此事ををせむればなり
 ときダビデナタンおいふ我エホバお罪を犯したりナタンダビデ
 おいひけるエホバまた汝は罪を除きたまへり汝死さるべし言
 されど汝此所行およりてエホバは敵に大なる屈る機會を與へた
 れば汝に生れし其子必ず死べしときかくてナタン其家おりへれ

り爰こゝにエホバウリヤは妻つまダビアダビアに生なむる子こを奪さらたまひけきバ痛いたく疾やめりまダビアダビア其その子このためために神かみを求もとむ即ちダビアダビア斷き食くして入り終しまり夜よ地ちを臥ふしたりまダビアダビアの家いへの年とし寄より彼かれは傍そばに立ちてうれを地ちより起たちまゆんとせしかども彼かれ肯まげず又かれらどもに食くを爲なさりきま第七なな日ひお其その子こ死しりまダビアダビアの僕こゝ其その子この死したるまどもをまダビアダビアお告つるまどもを恐おそれたりかれらいひけるの子この尙なほ生なむる間まお我等われら彼かれを語かたたりしお彼かれ我等われらの言ことを聽きいれきりき如何いかに彼かれお其その子この死したるを告つぐべけんや彼かれ害がいを爲なんどま然しかもまダビアダビア其その僕こゝの私ひそ語ごとくを見てみてまダビアダビア其その子こ死したるを曉しれりまダビアダビア乃すなはち其その僕こゝ子この死したるまどもいひけきバウウれら死りどいふ是こゝにたいてまダビアダビア地ちよりおきあがり身みを洗あらうす膏をぬり其衣服いふくを更かてエホバエ他家たがにいりて拜ほし自己おのれの家いへに至いたり求もとめておのれのためお食くを備そなへしめて食へり三僕こゝ等ら彼かれいひけるの此この汝おがある所の何なに事こと

あるや汝お子この生なむるあひだのこきがためお斷き食くして哭きながら子死しる時に汝おの起たちて食を爲なすまダビアダビアいひけるの嬰あや孩なれ尙なほ生なむるあひだおわが斷き食くして哭きたるの我われ師しりエホバエ我われを憐あはれみて此こ子こを生なまめたまふを知しんと思ひたまさるり三されど今いま死したれバ我あんを斷き食くをべけんや我われ再また次またかきをうへら志こむるを得えんや我われうれれ所に往まりけきせ彼かれの我われ所ところにおへらさるべし三ダビアダビア其その妻つまバテレババテレバを慰なぐさめおれれ所ところにいりてかれどもに寢いたりけれバ彼かれ男子おとこを生なりまダビアダビア其その名なをソロモンと呼ぶエホバエあれを愛あいしたまひて三預よ言げん者ものナタンを遣つかはし其名なをエホバエ故ゆゑによりてエアデアア（エホバエは愛あいする者）と名けまめたまふ爰こゝにヨアブアンモンれ子孫こゝろのラバを攻せめて王城みやこを取とれりモロアブア使者つかひをまダビアダひのりしていひけるの我われラバを攻せめて水城みやこを取とれり三さきに汝今いま餘あまれ民を集め斯城みやこを向むて陣まどりて之を取とり恐らくの我われ此こ城みやこを取とり

て人我名をもて之を呼にいたらんども是はあいてダビデア民を惡くあつめてヨバにゆき攻て之を取り去るしてダビデアアンモン王は冕を其首より取りあしたり其金は重の一タラントありまた寶石を嵌たりみれをダビデア首に置ダビデア其邑は掠取物を甚だ多く持出せり三くくてダビデア其の民を將いだしてこきを録と鉄の千齒と鉄の斧にて斬りまた瓦陶の中を通行せたり彼斯のこどくアンモンの子孫の凡ての城邑に居せり去りしてダビデア民は皆エルサレムを還りぬ

第十三章 此後ダビデアの子アブサロムはタマルと名くる美しき妹ありレダビデアの子アムノンこれを感じたりニアムノン心を苦しめて遂に其姉妹タマルのためあわづらへり其はタマルは處女ありけれバアムノンおれに何事をも爲しがたしと思ひたればなりニ然るにアムノンに一人の朋友ありダビデアの兄弟シメアは

子あして其名をロナダブといふロナダブは甚だ有智き人ありロ彼アムノンおれにひけるに汝王の子るん今日に斯く窘ゆくや汝我を告ぐるやアムノン彼にいひけるに我わが兄弟アブサロムの妹タマルを戀ふニロナダブあきおれにひけるに床を臥て病と伴り汝れ父の來りて汝を見る時これおれに請ふわが妹タマルをして來りて我に食を子へおれに食を見て彼の手より食ふことをうる様おれに目のおまへて食物を調理せよとアムノンすなわち臥して病と伴りてわが王の來りておれの色を見る時アムノン王にひたるに請ふ吾妹タマルをして來りてわが目のまへにて二の菓子を作へおれに我に手より食ふを得させよと是をわいてダビデアタマルの家におれにひつりしけるに汝の兄アムノンの家おれにきておれのためお食物を調理せよとタマル共兄アムノンに家おいたるにアムノンの臥し居たりタマル乃ち粉をどり

て之を搦てかきの目のまへふて菓子を作へ其菓子を焼きた鍋を
 取て彼れまへへ傾出たり走られども彼食ふことを否めりまらし
 てアマノンいひけるは汝ら皆我を離きていでよと告ぐれをはる
 れていでたり+アマノン+タマルにいひたるは食物を寢室へ持
 たり我汝の手より食へんとタマル乃ち己の作りたる菓子を取り
 て寢室に持ゆきて其兄アマノンにいひたるは+タマル+彼に食しめん
 て近く持いたれる時彼タマルを執へて之にいひけるは妹よ來り
 て我と寢よ+タマル+のれにいひけるは否兄上よ我を辱しむる
 むれ是のとき事又イスラエルに行はれず汝此愚ある事をなす
 べからず+我の何處かわが恥辱を棄んる汝のイスラエルの愚人
 の一人どあるべしされば請ふ王に語れ彼我を汝に予さるること
 あるべしと+然とも+アマノン其言を聽ずしてタマルよりも方
 りければ+タマル+を辱めてみれど信に寢たりまがす還ふアマノ

ン甚だ深くタマルを惡むといたる其うきを惡む所れ惡むのうきを
 を戀ひたるどころの戀よりも大なり即ちアマノンかれにいひけ
 ると起て往々よまうれアマノンにいひけるは我を返して此惡を
 作るあるれ是は汝がさきお我あしたる所の惡よりも大なりと
 走られども聽いれずを其側お仕ふる少者を呼ていひけるは汝此
 女を召が附より遣りいだして其後お戸を鍵せよ+タマル+振袖を
 着るたり王の女等れ處女あるものは知れどとき衣服をもて替ひ
 たりアマノンの侍者うれを穿にいだして其後お戸を鍵せり+タ
 マル+衣を其首お蒙り着たる振袖を裂き手を首あかせて呼りつ
 去おけり+其兄+アバサロムかれにいひたるは汝の兄アマノン汝
 と信お在しや然と妹よ臥せよ彼は汝の兄あり此事を心に留る
 りれどおくてタマルの共兄アバサロムは家お慮しく住を居きり
 ミ+ダビデ+王是等の事を惡く聞て甚だ怒れり+アバサロム+の+アム

ノンにむりひて善も悪も誤さりき其のアブサロムアムノンを
 惡きたればあり是にかれがあの色の妹タマルを辱めたるに由
 り全二年は後アブサロムエフライムの邊あるバアルハツルに
 て羊の毛を剪め居て王の諸子を悉く招けり言アブサロム王の
 所にいりていひたるに祝よ僕羊の毛を剪めをるぬがぬく王
 と王の僕等僕どもも亦來りたまへ王アブサロムあひひけるに
 否且ガ子よ我等を皆いたらしむるなかれおろくの汝の糞を多
 くせんアブサロムダヒテを強ふ去れどもダヒテ往ことを肯せ
 すしてかれを祝せり言アブサロムいひたるに若去らすば請ふ
 わが兄アムノンをして我らどもに來らぬめよ王うれあひひ
 るに彼あんず汝どもにゆくべけんやと言さるとアブサロムか
 れを強たきバアムノンと王は諸子を皆アブサロムどもあひあ
 めめたり言愛ふアブサロム其少者等に命じていひけるに請ふ汝

らアムノンと心の酒によりて樂む時を祝すまてわが汝等あア
 ムノンを撃てと言ふ時に彼を殺せ懼るまらむ汝等に之を命じ
 たるに我ああらすや汝ら勇しく武くあれと言アブサロムの少者
 等アブサロムは命せしむとくアムノンにみしられ王の諸子皆
 起て各其驥馬に乗て逃たり王の諸子を悉く殺して一人も遺るもの
 たりていぬくアブサロム王の諸子を悉く殺して一人も遺るもの
 ありしと王乃ち起ち其衣を裂きて地に臥す其臣僕皆衣を裂て其
 傍にたてり王の御子等ある少年を皆殺したりと思たまふありれ
 り王主よ王の御子等ある少年を皆殺したりと思たまふありれ
 アムノン獨り死るのみ彼ダアブサロムの妹タマルを辱めまめた
 る日よりアブサロム此事をさだめおきたるあり言され王主王
 よ王の御子等皆死るといひて此事をおもひ煩ひたまふありれア
 ムノン獨り死たるるまばなりと言斯てアブサロムに逃れたり愛ふ

守望まもらるたる小者ちひ目をあげて視みたるを視みよ山やまに傍そばよりして已やれ後のちに遣つかり多くの人ひと來きれりヨナダブ王みにいひたるに視みよ王みの御ご子こ等ら來きる僕のいへるがごとく志こころありと云い彼かれ語かたるふとを終はし時とき視みよ王みの子こ等ら來きり聲こゑをあげて哭なり王みと其その僕こゝろ等ら皆みな大おほく甚いたく哭なり云い倍よアブサロムアハの逃にげてゲシユルシの王みアモホアの子こタルマイアにいたるダビアアの日ひ々々其その子このためためふ悲あはれめり云いアブサロムアハに逃にげんと思おもひ煩わづらふ其そのはアムアムノンンに死したるおよりてダビアアの事ことのあきらめたればあり

第十四章

ゼルヤゼの子こヨアブア王みの心こころのアブサロムアハを趣おもくを知しれりニヨアブア乃すなはちラコアアに人ひとを遣つかりて彼かれ處ところより一人ひとりの哲ち婦はを呼よびたり云いめて其その婦はにいひけるに請こゝろふ汝きみ喪なふある真ま似にして喪なの服くさを着き油あぶらを身みぬらす死者しにのためためふ久ひしく哀あはれしめる婦はのごとく爲なり

て王みの所ところにいたり是こゝのごとくうれしむ語かたるべしとヨアブア其その語かた言いををれの口くちに授たづけたりヨアブアの婦は王みにいたり地に伏ふて拜かし王みにいひけるに王みよ助たすけたまへ云い王み婦はにいひけるに何なに事ことなるや婦はにいひけるに我われの實まことを告つげしめて且かつ夫おとこ死したり夫おとこの仕つかへ女むすめ二人ふたりの子こあり俱ともに野のを争まをひしが誰たれもかれらを拮あつめものあきおより此こゝ途みちに彼かれを撃うて殺ころせり云い是こゝは云いわいて視みよ至いた家いへ仕つか女むすめお返かへりていふ其その兄弟あに弟いを撃うて殺ころしたる者を付つせ我われらうれをうの殺ころしたる兄弟あに弟いの生命いのちのためために殺ころさんと斯ごとく嗣つ子こをも滅ほろぼし存たもてる且かつ炭すす火ひを熄けてわが夫おとこの名なをも遺のこ存たもてるも地ちの面おもてに無ならぬとす云い王み婦はにいひけるに汝きみの家いへを往ゆて我われ汝きみの事ことにつきて命いのち令しるしを下くださん云いテコアアの婦は王みにいひけるに王みわが主あまよぬがく其その罪つみの我われとわが父ちちの家いへを歸かへして王みと王みの位ゐを罪つみをわらさきと玉たまにいひけるに誰たれもても爾なんを語かたる者ものをバ我われを將まさ來きれ去さりせ彼かれくさねて爾なんを觸ふること無なるべしと

婦いひけるの願くの王爾の神エホバを憶えての仇を報ゆる者
 をして重て滅すみを爲めすわが子を贖ことあるらめれたま
 へど王いひたるのエホバの生く爾の子の髪の毛一すぢも地を限る
 みどあるるべし婦いひたるの請ふ仕女をして一言わが主王ふ
 言えめれたまへダビデいひけるの言ふべし婦いひけるの爾をん
 予斯る事を神の民にひうひて思ひたるや王此言を言ふより王
 の罪ある者のごとし其の王の放きたる者を歸らめめさればあ
 り抑我等は死さるべからず我等の地に滴れたる水の再び聚る
 能はざるがごとし神の生命を取りたまふ方法を設けて其放れ
 たる者をして己の所より放たきををることあるらまはむ我此事を
 王我主に言んとて來さるの民我を恐れめめたきばあり故に仕女
 謂らく王に言ん王婦れ言を行ひたまふらんと其の王聞て我
 とはが子を共に滅して神の產業に離れめめんとする人の手より

婦を救ひいだしたまふべきばなり也仕女また思ひ王わが主の
 言の思どあるべしと其の神の使のごとく王わが主の善も悪も聽
 たまへばありねがくの爾の神エホバ爾と其の在せど大王また
 へて婦いひけるの請ふわが主に問んとよろの事を我に隠すな
 りと婦いふ請ふ王わが主言たまへ王いひけるは此をべての事
 にあいてのロアブは手爾とよもああるや婦答へていひけるは爾
 の靈魂は活く王わが主よ見て王わが主の言たまひしところの右
 にも左にもまがらず實に爾は僕に命は是等の言を悉く
 仕女の口を授けたり其事の見ゆるとよろを復んどて爾は僕に
 アブ此事をなしたるなり然どわが主は神の使の智慧のごとく智
 慧ありて地をある事を悉く知たまふと是に在いて王ヨアブに
 いひけるの祝よ我此事を爲すされば往て少年ケブサムを遣歸
 るべしヨアブ地を伏し拜し王を祝せりまろしてヨアブいひけ

るに王は主よ王の言を行ひたまへば今日僕わが爾に憑るよ
 を知るぞ三ヨアブ乃ち起てケルニ往きアゲサロムをエルサ
 レムに攜きたれり言王いひけるに彼の其家へ退くべしわが面を
 見るべららずと故にアブサロム己の家へ退きて王の面を觀ぎり
 倍イスラエルの中にアブサロムのごとく其美貌のために讚
 られたる人のありき其足の跡より頭の頂にいたるまで彼に
 瑕疵あるふどなし云アブサロム其頭を剪る時其頭は髪を衡る
 王の權衡は二百シケルあり毎年の終ハアブサロム其頭を剪り是
 の己の重よりて剪たるあり云アブサロム三人の男子と一人の
 タマルといふ女を生れたりタマルは美玄あり云アブサロム二
 のあひだエルサレムにをりたれども王の顔を見ざりき是に
 りてアブサロム王を遣さんどてコアブを呼に遣りしける夕彼來
 るふどを告せず再び遣せしめども來るふどを告せざりき云アブ

サロム其僕いひけるに觀よアブの田地の我の近くありて
 其處に大麥あり往て其火を放てとアブサロムの僕等田地の火
 を放てり云ヨアブ起てアブサロムの家へ來りてふれにいひける
 の何故爾の僕等田地に火を放たるや云アブサロムコアブにい
 ひけるに我人を爾が遣として此に來れ我爾を王につかりさんと
 言り即ち爾をして王に我何れためケルニよりきたりしや彼
 處に尙あらを我ためわの反て善しと言えめんとせり然バ我今王
 の面を見ん若し我に罪あらバ王我を殺せし三ヨアブ王い
 りてふれを告たきバ王アブサロムを召す彼王いたりて王のま
 へに地に伏て拜せり王アブサロムを接吻す
 一此後アブサロム己のために戰車と馬を備たり云アブサロム
 へに驅る者五十人を備たり云アブサロム夙興きて門の途の傍
 ふたち人の訴訟ありて王に裁判を求めんとて來る時アブサロ

其人を呼ていふ爾の何の邑に居るやと其人僕にイスラエルの
 某の支派の者ありといへバニアブサロム其人にいふ見よ爾の事
 の善くまた正し然と爾に聴くべき人の王いまだ立ずどもアブサ
 ロム又嗚呼我を此地の士師とあす者もがな然邑バ凡て既既に公
 事ある者は我ふ來りて我之を公義を爲しわたへんといふまた
 人彼を拜せんとて近づく時彼手をのちして其人を扶け之を接
 吻すハアブサロム凡て王に裁判を求めんとて來るイスラエル人
 是れおどくおせり斯アブサロムのイスラエルの人の心を取
 り七期て四年の後アブサロム王にいひけるに請ふ我をして往て
 ヘブロンにてエホバを我當て立し願を果さしめよハ其の僕スリ
 アのゲメンルも居て時願を立て若しエホバ誠にお我をエルサレム
 にお歸りたまひ我エホバも事へんと言たさばありと王うれ
 しいひけるに安らふ往けと彼を起てヘブロンに往り十左

ろしてアブサロム衆ふ者をイスラエルの支派に中お徹く遣りし
 て言せけるに爾等喇叭の音を聞バアブサロムヘブロンにて王と
 ゐれりと思ふべしと二百人の招へる者エルサレムよりア
 ブサロムどもにゆけり彼らに何心あくゆきて何事をもまらざ
 りきとアブサロム犠牲をささぐる時おダビデは議官ギロム人アヒ
 トベルを其邑ギロムより呼よせたり徒黨強くして良次第にアブサ
 ロムに加はりぬと愛お使者ダビデお來りてイスラエルの人の心ア
 ブサロムおまたがふといふ言ダビデおのこを求めエルサレムに
 居る凡ての僕にいひけるに起てよ我ら逃ん然らずバ我らアブサ
 ロムより遁るゝわたのさるべし急ぎ往け恐らくの彼急ぎて我ら
 に還ひつき我等に害を蒙らせ刃をもて邑を奪んま王の僕等王お
 いひけるは誠よ僕等王わが主の還むとみろを凡て爲んま王いで
 仰き其全家おまたがふ王十人の妾ある婦を遣して家をまも

らしむる王いでゆき民を治めしめたがふ彼等道の家お息めり大
 りきの儀等みな其傍に進みクレブ人どベレブ人および彼おした
 がひてガテよりきたれる六百人のガテ人みる王のまへお進めり
 時お王ガテ人イツタイおひひける何ゆゑに爾もまた我ら
 どよもにゆくや爾あへりて王どよもおをる爾の外國人おして移
 住て處をもどむる者あり王昨日來れり我の今日足が得るど
 ろに往くおれバ豈爾をして我らどよもにさまよせしむべけん
 や爾歸り爾の兄弟をも攜歸るべしねがはぬと思と眞實爾どよもに
 およニイツタイ王にふたへていひけるおエホバは活王わが主は
 活く爾お王わが主いりある處に坐すども生死どもお僕もまた其
 處に居るべしニダビディアツタイおひひける進みゆけガテ人イ
 ツタイ乃ち進みかれのすべての從者およびかれどよもにある妻
 子皆進めり國中皆大聲をあげて哭き民皆進み王もまたキアロ

ン川を渡りて進み民皆進みて野の道におもむけり王觀よザラク
 および俱にあるレビ人もまた皆神の契約の匱を昇ていたり神の
 匱をおろして民の悪く邑よりいづるをまてりアビヤタルもまた
 のぼり王ふよ王ザラクにいひける神の匱を邑に昇もどせ
 若し我エホバのまへに思をうるならバエホバ我を攜かへりて我
 おみれを見し其仕處を見したまへんされどエホバもし我汝を
 悦むすと斯いひたまへん王また祭司ザラクおひひける汝先見
 ころを我おみしたまへん王また祭司ザラクおひひける汝先見
 者汝らの二人の子即ち汝の子アヒマズとアビヤタルれ子ロナ
 タンを伴ひて安然お城邑お歸れ見よ我之汝より言はきたりて
 我に告るまで野の渡場お留まらんと云ザラクとアビヤタルすな
 へち神の匱をエルサレムお昇もどりて彼處に止まれり王ふよに
 ダビテ極慢山の路を降りしが降るときに哭き其首を蒙みて跪足

にて行りおれど俱ある民皆各其首を蒙みてのぼり哭つとのぼ
 れり三時おアヒトベルダアブサロムと與せる者の中にあるふど
 ダビアお聞おけれバダビアいふエホバねダグのハヒトベルの
 計策を愚ふら去めたまへど三ダビア巖ある神を拜する處に至
 れる時祝よアルキ人ホシヤイ衣を裂き土を頭おりむりてきたり
 てダビアを迎ふ三ダビアかきおひけるは爾若し我どもお進
 まバ我の負おあるべし言されど汝もし城邑おりへりてアブサ
 ムにむらひ王よ我爾の僕おなるべし此まで爾の父の僕たりし
 どく今また汝は僕おなるべしといハ爾の父の僕たりし
 ルの計策を敗るおいたらん三祭司ザラクとアピヤタル附ども
 お彼處おあるおあらずや是故に爾ダ王の家より聞たる事おこ
 しく祭司ザラクとアピヤタルお告べし祝よおらどもに
 彼處おえろの二人の子即ちザラクの子アヒマアズとアピヤタル

の子ヨナタンをるあり爾ら共聞たる事をこしく彼等の手お
 よりて我お通すべし三ダビアの友ホシヤイすおち城邑にいた
 りぬ時にアブサロムハエルサレムに入居たり

第二十章

ハ鞍おける二頭の驢馬を引き其上にハ二百乾葡萄一百連乾
 の團塊一百酒一甕を載きたりてダビアを迎ふニ王ダバにいひけ
 るハ此等の何あるかダバにいひけるハ驢馬ハ王の家族の乗るため
 ハンと乾棗ハ少者の食ふため酒ハ野お困憊たる者の飲むため
 りニ王いひけるは爾の主人の子ハ何處おあるやダバ王にいひけ
 るハおれハエルサレムに止まる其は彼イスラエルの家今日我父
 の國を我おりへさんと言をれバありヨ王ダバおひひけるハ祝よ
 メヒボセテの所有ハ悉く爾れ所有おあるべしダバおひひけるハ我
 拜す王ダバ主よ我をして爾のまへに思を蒙むら去めたまへニ

てダビテ王バハリムにいたるを視よ彼處よりサウルの家の墓の者一人出きたる其名をシメイといふケラの子あり彼出きたりて來りつゝ詛へり又彼ダビテとダビテ王の諸臣にむかひて石を投たり時ハ民と勇士皆王の左右ありセシメイ詛の中ハ斯いへり汝血を流す人よ爾邪ある人よ出され出さきハ爾ガ代りて位に登りしサウルの家の血を見てエホバ爾歸したまへりエホバ國を爾の子アブサロムの手に付したまへり視よ爾ハ血を流そ人あるによりて禍患の中ハあるありルセルヤの子アビシヤイ王ハいひけると此死たる犬あんテ王ガ主と詛ふべけんや請ふ我をして涉りゆきてゐるの首を取しめよ王いひけるハセルヤの子等よ爾らの興るとふるにわらず彼の詛ふハエホバ彼ハダビテを詛へと言たまひたるよふるふれば爾爾あんテ然するやと言べけんや王ダビテ又アビシヤイよび己の諸の臣僕にいひけるハ

視よ王ガ身より出たるわガ子わガ生命を求む况や此ベニヤミン人をや彼を聴して詛ひしめよエホバ彼に命じたまへるありエホバはガ難を俾視きたまふとあらん又エホバ今日彼の詛ひのために我ハ善を報いたまふとあらんとす斯てダビテと其從者途を行けるハシメイハダビテハ對へる山の傍に行つゝ詛ひまた彼ハむろひて石を投げ應を擲たり王ねよび俱ハある民皆アエビムに來りて彼處ハ息をつけり倍アブサロムと總ての民イスラエルの人々エルサレムハ至きりアヒトベルもアブサロムとともにはいたる其ダビテの友なるアルキ人ホシヤイアブサロムの詩ハ來りし時アブサロムハいふ願くハ王壽うれ願くハ王壽うれ其アブサロムホシヤイにいひけるハ此ハ爾ガ其友に示す厚意あるや爾なんテ爾の友と往ざるや王ホシヤイアブサロムハいひけるハ然らずエホバと此尺とイスラエルの總の人々の惡む者に我

の属し且其人どよも居るべし且又我輩に事ふべき其子の前に事ふべきあらずや我の爾れ父のまへに事しごとく爾のまへに事べし二十爰にアブサロムアヒトベルにいひたる我等如何か爲べき
 爾等計を爲すべしとニアヒトベルアブサロムにいひける爾の父が遺して家を守まむる妾等の處へ入れ然バイスラエル皆爾が其父に惡まるよを聞ん而して爾どよもにをる總れ者の手強くなるべしとニ是にあいて屋脊ホアブサロムのためホ天幕を張られバアブサロムイスラエルの目のまへにて其父の妾等の處へ入りぬ三當時アヒトベルが謀れる謀計の言ふ問たるごとくなりきアヒトベルの謀計の皆ダビデアアブサロムと俱に是のごとく見えたりき
 時バアヒトベルアブサロムにいひたる爾請ふ我に一萬二千の人を擇み出さしめよ我起て今夜ダビデアの後を追ひニ彼が僂れて手弱ありし所を襲ふて彼をおびえしめん而して彼どよ

もあをる民の逃ん時ホ我王一人を擊どり三總の民を爾が歸せまむべし夫衆の歸せるの爾が求むる此人ホ依られバ民みる平穩にふるべし且此言アブサロムの目とイスラエルは總の長老の目との當と見えたりエアブサロムにいひけるアルキ人ホシヤイをも召きたれ我等くれが言ふ所をも聞んどホシヤイ乃ちアブサロムに至るホアブサロムうれにたりてにいひけるアヒトベル是のごとく言り我等其言を爲べき若し可すバ爾言ふべしセホレヤアブサロムにいひたる此時ホあたりてアヒトベルが授たりし訓器は善らずホシヤイまたいひける爾の知ることく爾の父と共從者の勇士あり且彼等は野にて其子を奪れたる熊の如く其氣激怒をきり又爾の父は戰士みれば民と共ホ宿らざるべし且彼の今何の穴なり何の處なり匿きをる若し數人の者手始めに仆るバ其を聞く者は皆アブサロムに従ふ者の中に取わりと言はん十志

くらバ獅子け心のことき心ある勇猛き夫といふども全く挫碎ん
 其はイスラエル皆爾の父の勇士にして彼どもに在る者の勇猛
 き人あるを去れバなりと我の計議ハイスラエルをダンよりベエ
 ルレバにいたるまで海濱の沙の多き如くお恐く爾の處あつと
 へ集めて爾親ら戰陣お臨むべしと我等彼の見出さるゝ處あて彼
 を襲ひ露の地お下るがごとく彼のうへに降らん云りして彼あよ
 び彼どもに在るすべての人々を一人も遺さざるべしと若し彼
 何々の城邑お集らバイスラエル皆繩を其城邑おあけ我等みれを
 河お曳きたふして其處に一け小石も見えざらまむべしと昔アブ
 サロムとイスラエルの人々皆アルキ人ホレヤイの謀計ハアヒト
 ベルの謀計よりも善しといふ其ハエホバアブサロムに禍を降さ
 んどてエホバアヒトバハ善き謀計を破ることを定めたまひた
 るにありま爰にホレヤイ祭司サドタとアヒヤタルおいひけるに

アヒトバハアブサロムとイスラエルの長老等れために斯々に謀
 れりまた我の斯々に謀きりまされバ爾ら速お人を遣してダヒデ
 お告て今夜野の渡場に宿ることをく速お渡りゆけといへおろ
 ちく王および俱おある民皆呑つくされん時ハロナタンとア
 ヒヤアズハコンロケルお侯居たり是ハ城邑おあるを見られさ
 んどてあり爰に一人の仕女おきて彼等お告げされを彼らダヒデ
 王お告んどて往く大しするに一人の少者おれらを見てアブサロ
 ムにつげたりさきと彼等二人お急きさりてバホリムの或人の家
 においたる其人の庭お井ありておれら其處にくだりけきバ妻
 をどりて井の口のうへお掛け其上お擣たる麥をひろげたり故に
 事知れきりき三時にアブサロムのお僕等其婦の家に來りていひけ
 るハアヒヤアズとロナタン何處にをるや婦の色らに彼人々ハ
 小川を濟きりといふりれら尋ねたきとも見當ききバエルサレム

に歸れり三彼等が去し時あるの二人の井よりのぼりて往てダビ
 王に告げたり即ちダビアに言けるを起て速に水を濟れ其の
 ヒトヘル斯爾等について謀計を爲したればありとミダビア起て
 已どもある凡ての民どもにヨルダンを濟れり暗に一人
 もヨルダンを濟らざる者はなかりきミアヒトヘル其謀計の行
 れざるを見て其驢馬に鞍あき起て其邑に往て其家にいた
 り家の人に遺言して自ら縊れ死て其父の墓に葬らる言爰にダビ
 アマハナイムに至る又アブサロム己どもにあるイストラエル
 の凡の人々どもにヨルダンを濟れりミアブサロムアマサをヨ
 アブは代りに軍は長ど爲りアマサの夫のナハシの女にてヨアブ
 の母セルヤの妹なるアヒガルに通じたるイシマイル人名のエテ
 ルといふ人れ子あり云かくてイストラエルとアブサロムのギレ
 アの地に陳とれりミダビアマハナイムにいたざる時アンモンの

子孫の中あるツバのナハシれ子シヨビとロデバルのアンニ
 の子マキルおよびロケリムはギレア人バルロライニ臥床と鑄
 釜と陶器と小麦と大麥と粉と畑麥と豆と小豆の畑たる者とニ密
 と牛酪と羊と穀をダビアおよび俱にある民の食ふために持來れ
 り其の彼等民の野にて飢餓れ渴くるらんと謂たればあり
 長百夫の長を立たりニ志してダビア民を三三分ちて其一をヨ
 アブの手を託け一をセルヤの子ヨアブの兄弟アヒシヤイの手を
 託け一をガテ人イツタイの手に託けたりかくして王民にいひけ
 るの我もまた必ず汝らどもも出んどニされと民いふ汝の出べ
 らす我等如何も逃るども彼等の我等の心を定めと又我等半々
 ども我等の心を定めざるべしと汝は我等の一萬分し故に汝
 の城邑の中より我等を助けんバ善哉王われらわいひけるは汝

等の目お善と見ゆるところを爲すべ志どあくて王門の傍お立ち
 民皆或は百人或は千人とありて出づエ王ヨアブアヒシャイたよ
 びイツタイお命じてわがためお少年アブサロムを寛に待へよと
 いふ王のアブサロムの事ふついで諸の將官に命を下せる時民皆
 聞りて爰お民イスラエルおむひて野に出でエフライムの叢林
 お戦ひしガゼイスラエルの民其處おてダビデの臣僕のまへお敗
 る其日後處の戦死大おして二萬おいたれりハ太りして戦徧く其
 地の表お廣がりぬ是日叢林の滅ぼせる者の刀劍の滅ぼせる者よ
 りも多ありき爰にアブサロムダビデの臣僕お行き遣り時おア
 ブサロム驛馬に乗居たりしダ驛馬大ある橡樹の繁き枝の下を過
 ぎしバアブサロムの頭其橡に擧りて彼天地のあひだにあがれり
 驛馬はかれの下より行過たり十一箇の人見てヨアブお告ていひ
 たるハ我アブサロムダ橡樹に懸りたるを見たりとエヨアブ共告

たる人あひひけるはさらバ爾見て何故に彼を其處おて地に擧落
 さりしや我爾に銀十枚と一本は帯を與へんものを三人ヨア
 ブあひひたるは假令我わが手に銀千枚を受べきも我は手をいだ
 して王の子お敵せし其ハ王我等の聞るまへにて爾とアヒシャイ
 とイツタイに命じて爾ら各少年アブサロムを害するあかれとい
 ひたまひたれをありき我若し反いてりとの生命を戕賊はハ何事
 も王に懸るる所あけきと爾自ら立て我を賣んと昔時にヨアブ我
 かく爾とまもに滞るべあらすといひて手に三木の槍を携へゆき
 て彼の橡樹の中に尙生をるアブサロムの胸に之を衝通せりヨ
 アブの武器を執る十人の少者続きてアブサロムを撃ち之を死
 めたりまうくてヨアブ喇叭を吹けれバ民イスラエルの後を追ふ
 むどを息てるへれりヨアブ民を止めたきバありと衆アブサロム
 を將て叢林の中ある大なる穴に投げいれ其上に甚だ大きく石を

疊あけたり是に於いてイスラエル皆おのゝ其天幕に逃るへき
 りてアブサロム我はわが名を傳ふべき子よしと言て其生る間に
 己のために一の表柱を建たり王の谷にあり彼おのれの名を其表
 柱に與たり其表柱今日にいたるまでアブサロムの碑と稱る其愛
 にザバクの子アヒマズいひたるに請ふ我をして趨りて王にエ
 ホバの王をまもりて其敵の手を免るべきとめたまひし音信を傳へ
 しめよと云ヨアブかきにいひける汝今日音信を傳ふる者ど
 あるべからず他日に音信を傳ふべし今日王の子死たれば汝音
 信を傳ふべからずヨアブクシ人にいひける往て爾が見たる
 所を王に告よクシ人ヨアブに禮をなして走り三ザバクの子アヒ
 マズ再びヨアブにいひけるに請ふ何にもわれ我をも亦クシ人
 の後より走ゆらしめよヨアブいひける我子よ爾の充分の音信
 を持ざるに何故に走りゆらんとするや云うべきいふ何れにもあれ

我をして走りゆらしめよとヨアブれにいふ走るべし是に於いて
 アヒマズ低地の跡をいしりてクシ人を走越たり其時にダビ
 デハ二の門の間に座するたり愛に守望者門の蓋上へのぼり石牆
 へのぼりて其目を擧て見るに視よ獨一人にて走きたる者あり
 守望者呼はりて王に告げれを王いふ若し獨らば口に音信を持
 つならんど其人進み來りて近づけり云守望者復一人の走りきた
 るを見よかば守望者守門者に呼りて言ふ獨一人にて走きたる
 者あり王いふ其人もまた音信を持ものなり云守望者言ふ我先者
 の走を見るにザバクの子アヒマズの走るが如しと王いひける
 王は善人あり善き音信を持來るならん云アヒマズ呼りて
 王にいひけるはねがくの平安あるまでとて王のまへに地に伏
 していふ爾の神エホバの讃へさきり云エホバかの手をあけて王わが主
 に敵したる人々を付したまへり云王いひける少年アブサロム

の平安あるやアヒマアズこたへたるの王の僕ヨアブ僕を遣はせし時我大ある隙を見たきども何を知らざるあり王いひたるの側にいたりて其處に立よど乃ち側にいたりて立つ三時に視よクレ人來きりクレ人いひけるのねがのく王晋信を受たまへエホバ今日爾をまもりて凡て爾にたち進ぶ者の手を死かれしめたまへり王クレ人にいひけるの少年アブサロム平安あるやクレ人いひけるのねがのく王わが主の敵よび凡て汝に起ち逆ひて害をなさんとする者の彼少年のごとくなれど王大に感ミ門の襪にのぼりて哭り彼行なぐらうくいへりわが子アブサロムよどが子わが子アブサロムよ嗚呼わき汝に代りて死たらん者をアブサロムわが子よどが子よ
 一 時にヨアブに告る者ありていふ視よ王のアブサロムは爲に哭き悲あむど其日の勝利の凡の民の悲哀とるれり其の

民其日王の其子れために憂ふと言ふを聞たきバあり其日民之戰爭に逃て羞たる民の竊て去がごとく竊て城邑にいりぬ王の其面を掩へり王大聲に叫てわが子アブサロムよアブサロムわが子よわが子よといふことよにヨアブ家にいり王の許にいたりていひける汝今日汝の生命と汝の男子汝の女子の生命および汝は妻等の生命と汝の妾等れ生命を救ひたる汝の凡の臣僕の顔を羞させたりは是の汝れのきを恐む者を愛えたるのれを愛する者を恐むあり汝今日汝が諸侯伯をも諸侯をも顧みざるを戒せり今日我さどる若しアブサロム生をりて我等皆死たらバ汝の目に遮ひしあらんせきと今立て出で汝の諸侯を慰めてかたるべし我エホバを指て誓ふ汝若し出ずを今夜一人も汝とも止るものありるべし是の汝が若き時より今にいたるまでに蒙りたる諸の災禍よりも汝に惡あるべしは是に於て王たちて門に坐す人々凡の民に

うきねぐのく王これを心に置たまふるれ其の僕我罪を犯
 したるを知ればあり故に覆よ我今日ヨセフの全家は最初に下り
 來りて王わが主を逐ふと三然にセルヤれ子アビシヤイ答へてい
 ひけるとシメインエホバは膏うよぎし者を誦たるに因て其がた
 めに誅さるべきにあらずやと三ダビデいひけるの爾らセルヤは
 子よ爾らたわづあるどころにあらず爾等今日我に敵どある今日
 豈イスラエルは中にて人を誅すべけんや我豈わが今日イスラエ
 ルは王どありたるをあらざらんやと三是をもて王のシメインに謂
 の誅されじといひて王あれお福へり言爰にサウルの子メビボセ
 ア下りて王をむかふ彼のり王の去し日より安か小歸れる日まで其
 足を飾らず其難を飾らず又其衣を濯ざりきと三彼エルサレムより
 きたりて王を逐ふる時王のれにいひけるのメビボセア爾あんろ
 我どもお往ざりしやと三彼ふたへけるのわが主王よわが僕我を

欺けり僕のわれ驢馬お鞍たきて其に乗て王の處におらんといへ
 り僕賊者あきバありと去るに彼僕を王は主お讒言せり然ど
 も王わが主の神は使のごとし故に爾は目お善と見るとあるを爲
 たまへ云わが父の全家の王は主は主はまへおの死人あるのとある
 お爾僕を爾は席にて食ふ者の中お置たまへりされば我何の理あ
 りてお重ねて王お哀訴するをえん王の色おひけるの爾あ
 んろ重ねて爾の事を言や我いふ爾とサバ其地を分つべしと三メビ
 ボセア王おひひけるの王わが主安然お其家に歸りたまひたれを
 むれお之を恐くどらあめたまへと三爰おギレアア人バルコライ
 ロケリムより下り王を送りてヨルダンを渡らんとて王どもお
 ヨルダンを渡れり三バルコライの甚だ老たる人にて八十歳あり
 きりれの甚だ大ある人あるれバ王のマハナイムに留る間王を養へ
 り三王バルコライおひひけるの爾我どもお濟り來き我エルサ

レムにて爾を我ども亦養はん言バルシャライ王いひけるわ
 ぐ生命の年の日尙幾何ありて我王ども亦エルサレムお上ら
 んや我の今日八十歳なり善きと悪きとを辨へるをえんや僕其
 食ふところと飲ぶところを味ふをえんや我再び謳歌の男と謳歌之
 女の聲を聴えんや僕あんや尙王わが主の累とあるべけんや
 女王ども亦ホルダンを濟りて只少しくもらん王あんや僕報
 賞を我に報ゆるお及ばんや言請ふ僕を歸らしめよ我自己の邑お
 てわが父母の墓の側お死ん但し僕キムハムを祝たまへかれを王
 わが主ども亦濟り往まめたまへ又爾の目お善と見る所を彼に
 命したまへ言王いひけるキムハム我ども亦濟り往くべし我
 爾の目お善と見ゆる所をくれお爲ん又爾が望みて我お求むる所
 皆我爾ためお爲すべしと言民皆ホルダンを濟れり王渡りし
 時王バルシャライお接吻してこれを祝を彼送お巴の所お歸れり早

うくて王ギルガルお進むにキムハムも亦進めりユダの
 民皆王を送れりイスラエルの民れ半も亦お進めり愛おイスラエ
 ル人々皆王に所おいたりて王にいひける我等れ兄弟なるユ
 ダ人々何故お爾を竊みさり王と其家族およびダビアども亦
 其凡の從者を送りてホルダンを濟りしやと言ユダの人々皆イ
 スラエルの人々お對へていふ王の我お近き故あり爾を
 んや此事について怒るや我等王の物を食ひしよとある
 や王我等お賜物を與へたることあるや言イスラエル人ユダ
 の人に對ていひける我の王のうちお十の分を有ち亦ダビアの
 うちおも我の爾より多を有つありまらるお爾なんや我らを輕
 じたるやわが王を導きおへらんと言し我最初なるにあらずや
 どされとユダ人々の言いイスラエルの人々の言よりも厲しく
 りき

子にしてベニヤミン人あり彼嘲吠を吠ていひけるハ我等ハダの中に分なし又エサイの子のうちには産業あしイストラエルよ各人其天幕に歸れよと是によりてイストラエルの人皆ダビデに隨ふことを止てのばりピクリの子シバに去たがへり然とユダの人々ハ其王に附てヨルダンよりエルサレムにいたさりエダビデアエルサレムにゐる己の家に行たり王其逼して家を守らせたる妾ある十人の婦をとりてこきを一つ室に守り置て養へりささきせり其處に之入りき斯かきらハ死る日まで閉こめられて生涯婦にてぞせせり爰に王アマサにいひけるハ我ために三日のうちユダの人々を召きたき去りして爾此處にをれヨアマサ乃ちユダを召あつめんとて往たりしが彼ダビデア定めたる期よりも長く留れり是に在いてダビデアピシヤイにいひけるハピクリは

子シバ今我等にアバサロムよりもおほくの害をなさんとす爾の主レ臣僕を率ゐて彼の後を追へ恐らくハ彼堅固ある城邑を獲て我等の目を逃れんと是によりてヨアブの從者レテ人たよび都の勇士彼に去たがひて出たり即ち彼等エルサレムより出てピクリの子シバの後を追ふハ彼等ガキベオンにある大石の傍に居りし時アマサのれらにむかひ來れり時にヨアブ我衣に帯を結て衣服どろし其上に刀を鞘にをさめ腰に結びて帯ひ居たりしが其劍脱け墮ちたりヨアブアマサにわが兄弟よ爾ハ平康なるやといひて右の手をもてアマサの鬚を持て彼に接吻せんとせしがアマサはヨアブの手にある劍に意を留さりければヨアブ其をもてアマサの腹を刺して其腸を地に流しだいだし重て撃に及むをさら去めてこきをみろせりあくてヨアブと其兄弟アピシヤイピクリの子シバの後を追りし時にヨアブの少者の一人

アマサの側にたちていふコアブを助くる者どダビアに附従ものはコアブの後に隨へどニアマサは血に染て大路の中に轉び居たり斯人民の皆立とまるを見てアマサを大路より田に移したるが其測にいたれる者皆見て立ちどまりければ衣を其上にかけたたり
 アマサ大路より移されければ人皆コアブに去たぐひ進みてヒクリの子レバの後を追ふ言彼イストラエル凡の支派の中を行て
 アベルとベテマアカに至るに少年皆集りて亦くまに去たぐひのけり
 ありて彼等來りて彼をアベルベテマアカに圍み城邑にひくひて壘を築けり是の壕の中にたてりくくしてコアブどもにある民皆石垣を崩さんとてみきを撃屠り去がま一箇の哲き婦城邑より呼りていふ爾ら聽よ爾ら聽よ請ふ爾らコアブに此に近よれ我爾に言んと言へども是の婦にちかよるに婦いひけるは爾のヨアブあるやうれ然りといひければ婦彼にいふ婦の言を聽

けのを我聽くといふ婦即ち語りていひけるは昔人々誠に語りて人必ずアベルに在いて索問べしといひて事を終ふま我のイストラエルの中の平和ある忠義ある者ありあくるに爾のイストラエルのにて母ともいふべき城邑を滅さんみとを求む何ゆゑに爾エホハの産業を呑み尽さんとするや
 コアブ答へていひけるは決めてしうらず決めてしうらずわれ呑み尽し或の滅ぼさんとせるみとあし
 三其事しうらずエフライムの山地れ人ヒクリの子名どレバといふ者手を舉て王ダビアに敵せり爾ら只彼一人を付せ然らば我此邑をさらんと婦コアブにいひけるは視よ彼れ首級は石垣の上より爾に投いだすべし
 三かくて婦其智慧をもて凡れ民の所にいたりければバクれらヒクリの子レバは首級を劍てコアブの所に投出せり是においてコアブ嗚咽を吹あらしければ人々散て邑より退きてなれく其天幕に還りぬ
 コアブのエルサレムにうへり

て王レ處にいたれりヨアブのイスラエルの全軍は長ありエホ
 ヤダの子ベナヤはクレテ人どベレテ人の長ありヨアブは微
 寡長ありアヒルデの子ヨレヤバテの史官ありニシヤの書記官な
 りザロクとアピヤタルの祭司ありニ亦ヤイル人イラはダビデの
 大臣あり

一ダビデの世に年復年と三年饑饉ありけれをダビデ
 エホバに問にエホバ言たまひなるは是をサウルと血を流せる其
 家のためあり其の彼嘗てギベオン人を殺したればありとニ是に
 あいて王ギベオン人を召てうれらにいへりギベオン人のイスラ
 エルは子孫にあらすアモリ人の殘餘ありしダイスラエルの子孫
 昔彼等に誓をあしたり然るにサウルイスラエルとユダの子孫に
 熱心あるよりして彼等を殺さんと求めたりニ即ちダビデギベオ
 ン人にいひけるは我爾等のために何を爲すべきら我何の贖賞を

爲さむ爾等エホバの産業を視そんやヨギベオン人彼にいひける
 我等のサウルとその家の金銀を取じ又汝に我られたためにイスラ
 エルの中の人一人をも殺すあられダビデいひけるは汝等が言ふ
 所我汝らのためを爲んニ彼等王にいひけるは我等を滅したる
 人我等を獵してイスラエルの境の中居留きらまめんとて我等
 にひかひて謀を設けし人々請ふ其人の子孫七人を我等も與へよ
 我等エホバの選みたるサウルのギベアにて彼等をエホバのまへ
 に懸ん王いふ我與ふべしとセされと王サウルの子ヨナタンの子
 あるメヒボセテを惜めり是の彼等のあひだ即ちダビデサウル
 の子ヨナタンの間エホバを指して爲る誓あるお因りハされ
 と王アヤの女リツバガサウルお生し二人の子アルモニドメヒボ
 セテれよびサウルの女メラブガメホラ人バルツライの子アアリ
 エルに生し五人れ子を取りて九かれらをギベオン人れ手に與へ

けれバギベオン人かれらを出せ上にてエホバは前ふ懸たり彼等
 七人俱々斃れて刈穫は初日即ち大麥刈の初時に死リテアヤは女
 リツバ麻布を取りて刈穫の初時より其屍の上に天より雨ふるまで
 みれをおかれのために盤の上に布きわきて晝の空は鳥を屍の上に
 止らぬ夜の野の獸をちりより止めざりき愛ハアヤは女サ
 ウルの妾リツバの爲しこぞダビデに聞之けきバサダビデ往てサ
 ウルは骨と其子ヨナタンは骨をヤベシギレアアは人々は所より
 取り是ハベリシテ人ダサウルをギルボアに殺してベテラシヤンハ
 荷ふ懸たるをわれらダ痛みざりたるも然なりダビデ其處より
 サウルの骨と其子ヨナタンの骨を携へ上りまた人々其懸らる
 たる者等の骨を斂たりまかくてサウルと其子ヨナタンは骨をベ
 ニヤミンの地のセラにて其父キレは墓に葬り都て王の命じたる
 所を爲り此より後神其地れたために祈禱を聴たまへりサベリシテ人

復イスラエルと戦争を爲すダビデ其臣僕どもも下りてベリレ
 タ人と戦ひけるダダビデ困憊居りけきバ其イシビベノダビデ
 を殺さんと思へりイシビベノダビデの巨人の子等の一人おて其槍の
 銅は重ハ三百シケルあり彼鎧しき劍を帶たりとあるれどもセル
 ヤの子アビシヤイダビデを助けて其ベリシテ人を撃つ殺せり是
 においてダビデの従者られお捕ひていひたるハ汝の再我等ども
 もに戦争に出べくらす恐らくは爾イスラエルの燈光を消さんと
 大此後再びゴブにおいてベリシテ人と戦あり時ハホレヤ人シベ
 カイ巨人の子等の一人あるサフを殺せりまた愛に復ゴブにてベリ
 シテ人と戦あり其處にてベテラレベム人ヤレオレギムの子エルハ
 ナンガテのゴリアテの兄弟ラミを殺せり其槍の柄は楯の楯の如
 くなりき又ガテに戦ありレダ其處に一人の身長き人あり手ハ
 ハ各六の指あり足ハ各六の指ありて其聯合せて二十四あり後

もまた 巨人の生る者ありニ 彼イスラエルを挑みしババビアの兄弟シメアは子コナタンを殺せりニ 是らの四人ハガテにて 巨人の生るものありシババビアの手と其臣僕の手ハ斃きたり

救ひいだしたまへる日ハ此歌の言をエホバに陳たり曰くニエホバハわが敵わが要害我を救ふ者ニ 且ダ磐の時なり且れ彼ハ倚賴ヒエホバハわが干わが救の角わが高槽わが逃躲處わが救主あり

爾我をすくひて 暴き事を死れ 志めたまふニ 我得めまつるべきエホバに呼りて 且ダ敵より救はるニ 死の波濤われを繞ニ 邪曲なる者の河われを穿れ 且ハ冥府の繩われをどり 且ハ死の檻 檻われハの予めりセわれ 艱難のうちハエホバをよび 且たわが 弱ハ顔れりエホバ 其殿より 且ダ聲をきよたまひわガ 嗚呼其耳ハいり 且ハ爰ハ地雲ハ撼き 天の基動き 震へり 且ハ彼怒りたまへむ あり

烟共鼻より出てのぼり 火ろ比口より出て 燒きつくし 此れる 炭かきより 燃いづニ 彼天を傾けて 下りたまふ 黒雲ろの足の下に ありニ ケルブハ 乘て 飛び 風の翼の上ハ あり 且ハ其周圍ハ 黒暗を おき 集まれる 水密雲を 幕と したまふ 且ハろの光より 炭火 燃いづニ エホバ 天より 雷をくだし 最高者聲をいだし 且ハ箭をい ちちて 彼等を ちらし 電をはちちて 彼等をうちやぶり 且たまへり 且

エホバの叱咤と どのの鼻の氣吹の風ハ よりて 海の底あらわれい 地ハ 基あらハ あり 且ハエホバ 上より 手をたきて 我をどり 洪水の中より 我を引あげ 且たまわガ 勁き 敵ハよび 我をおく 且ハより 我をそく 且たまへり 彼等ハ 我よりも 強かり けれむ あり 且ハ 彼等ハ わガ 萬民ハ 日に 且れに 臨めり 且ハと エホバハ わガ 支柱と あり 且ハ我を 廣き 處ハ 且ハ 且れに 且れに 喜ぶ 且ハ 抑お 我をそく 且たまへり 且ハ エホバハ わガ 義ハ 且たま 且ハ 且れに 報い 吾手の 清潔に 且たま 且ハ

我に剛したまへり三其のわれエホバの道を交もり惡をあしてわ
 グ神に離れしみてあけきとあり三その律例の皆わがまへあり其
 法憲の我みよを離れざるあり三且れ神にむらひて完全かり又身
 を守りて惡を遺たり三故にエホバわが教ふあたがひ其目のまへ
 にてが潔白あるに循てわきに報いたまへり三矜恤者わは爾矜恤
 ある者のごとくし完全人わの爾完全者れごとくし三潔白者わの
 爾潔白ものごとくし邪曲者わの爾嚴刻者のごとくまたまふ三
 難る民は爾みよを救たまふ然と矜高者わの爾の目見て之を卑した
 まふ三エホバ爾わが燈火ありエホバわが暗をてらしたまふ三
 われ爾わよりて軍隊の中を驅どどりわが神わ由て石垣を飛こも
 三神はろの道まつたしエホバの言は純粹し彼わ都て己わ倚頼む
 者の干となりたまふ三夫エホバのはる爾わ神たらん我等の神の
 はく孰る磐たらん三神わ且が強き堅塞あてて且が道を全うし言わ

夕足を鹿の如くあし我を且が崇邱わ立あめたまふ三神わが手に
 戦を致へたまへわが腕の銅け弓をも挽を得三爾我に爾の救の
 干を興へ爾の慈悲わきを大あらあめたまふ三爾且が身の下歩
 を恢廓あめたまへわ我驟ふるへす三わわれわが敵を追て之を得ろ
 ばし之を絶すまでわへらす三わわ彼等を絶し彼等を破碎
 ば彼等たちえすわ夕足の下わたふる三早汝戦のためわ力をもて我
 に帯しめまたわれ逆ふ者をわが下わ拜跪しめたまふ三爾わが敵
 をまて我わ後を見せあめたまふ我を惡む者わのわ之を得ろばさ
 ん三彼等環視せと救ふ者なしエホバを仰視と彼等あ應たまらず
 三地の塵の如くわき彼等をうちくだし又備間の泥のごとくわれ
 彼等をふみにちる三爾われをわが民の争闘より救ひ又われをま
 もりて異邦人等の首長とあしたまふわが知さる民我につらふ三
 異國人等は我わ媚び耳わ聞と均しく我にまたがふ三異邦人等の

喪へ其術所より戰慄て出づエホバの活る者ありわが盤の讓べ
 きるなわが救の靈の神はあがめまゆるべし只此神われに仇を報
 いしめ國々の民をわが下たくだらしめたまひ又わが敵れ中よ
 りわきを出し我にさらふ者の上に我をあげまた強暴人の前よ
 りわれを救ひいだしたまふ是故にエホバよわれ異邦人等のう
 ちお爾をほめ爾の名を稱へんエホバは王の救をたはひあし
 ろの受膏者あるダビアと其裔お永久に思を施したまふあり
 言即ち高く擧られし人ヤコブの神に膏をらよがきし者イスラエ
 ルれ善き職人は詔言ニエホバの靈わが中おありて言たまふ其諭
 言は舌おありヨイスラエルの神はひたまふイスラエルの榮わ
 れお語たまふ人を正く治むる者を畏れて治むる者は日の出
 け朝は光れごとく雲あき朝のごとく又雨の後の日は光明おより

て地に植えいづる新草のごとしわが家くく神とよもおあるおわ
 らずや神萬具備りて鞏固なる永久の契約を我おるまたまへり香
 ぐ救と喜を皆いかに生ぜめたまらんやまたかきとも邪あ
 る者と荆棘れごとくおまて手をもて取がたけれバ皆ともおすて
 られんと之おふると人は鐵と槍の柄とを其身お備ふべし是は火
 にやけて燒たぬるにいたらんは是等のダビアの勇士はれ名ありマ
 クモ二人ヤレシヨベアムの三人衆の長ありしが一時八百人おひか
 ひて槍を擲ひて之を殺せりは彼の次のアホア人はヤハの子エルア
 ガルおして三勇士の中の者なり彼共處お戰いんとて集まれる
 ペリシテ人おむむひて戰を挑ミイスラエルの人々の進ミのばれ
 る時にダビアとよもお居たりしがたちてペリシテ人を撃ち終に
 其手疲て其手劍小固着て離れざるにいたきり此日エホバ大ある
 救を行ひたまふ民の彼の跡おまたがひゆきて只獲取面已なり

きさの次のハタリ人アゲの子シヤンマあり一時ベリシテ人一隊
 とありて集まれり彼處ハ扁豆の満たる地也處あり民ベリシテ人
 のまへより逃たるにさ彼其地の中に立て禦ぎベリシテ人を殺せ
 り去りしてエホバ大ある救拯を行ひたまふま刈穫の時に三十人
 衆の首長なる三人下りてアドラムに洞穴に往てダビデアに詣れり時
 ホベリシテ人の隊レバイムの谷に陣とせり昔其時ダビデアの要害
 に居りベリシテ人の先陣の門に陣とせり我にのまをめん
 ひけるに誰かベテレヘムの門に陣とせり我にのまをめん
 とま三勇士乃ちベリシテ人の陣を衝き過てベテレヘムの門に
 る井の水を汲取てダビデアの許に携へ來り然とダビデア之をのむ
 むとをせずみれをエホバのまへに濃ぎてをいひけるはエホバよ
 我決してこれを爲し是の生命をりけて往し人け血ありと彼みきを
 飲みとを好まざりき三勇士は是等の事を爲り大セルヤの子ヨア

プの兄弟アヒシヤインの三十人衆の首たり彼三百人ありて槍
 を揮ひて殺せり彼其三十人衆の中に名を得たりま彼の三十人衆
 の中の最も尊き者にして彼等長とせり然とも三人衆に及
 びざりきニエホバの子カブソエルのメナヤは勇氣あり多くの
 功績ありし者なり彼モアブの人の獅子に如きもの二人を撃殺せ
 り彼の亦雪け時わ下りて穴の中にて獅子を撃殺せり三彼また容
 貌魁偉たるエロブト人を撃殺せり其エロブト人の手に槍を持た
 るに彼の杖を執て下りエロブト人け手より槍を振どりて其槍を
 もててを殺せりニエホバの子ベナヤ是等れ事を爲し三十
 勇士の中に名を得たりま彼の三十人衆の中に尊ありしれども三
 人衆ふは及ばざりきダビデアを参議の中に列しむ言三十人衆
 の中ハヨアブの兄弟アサヘルベテレヘムのトバの子エルハナ
 ンニハロブ人シヤンマハロブ人エリカバルブ人ヘレブテコア

人イツケレの子イラモアチトア人アピエセルホシヤ人メブンナ
 イスアホア人ザルモンキトバ人マハライニキトバ人バアナの子
 ヘレブベニヤミンの子孫のギベアより出たるリバイの子イツタ
 イミヒラトシ人ベナヤガアシの谷のヒダイミアルバア人アピア
 ルボンバホリム人アズマウテニシヤルゴニ人エリヤバキゾニ人
 ヤセンニハラリ人シヤンマの子ヨナタンアラリ人シヤラルの子
 アヒアムニウルの子エリバレテマアカ人ヘベルギロ人アヒトベ
 ルの子エリアムニカルメル人ヘズライアルバ人バアライニゴゾバ
 のナタンの子イガルガド人バニアンモニ人セレクセルヤの
 子ヨアブレ武器を執る者ベエロブ人ナハライニエタリ人イラエ
 タリ人ガレブニヘア人ウリヤあり都三十七人
 動して彼等に敵對詰め往てイスラエルとユダを敵へよと言ふめ

たまふニ王乃ちヨアブによびヨアブとよもにある軍長等にいひ
 けるに請ふイスラエルの諸の支派の中をダンよりベエルシバに
 至るまで行めぐりて民を核へ我をして民の數を知しめよヨア
 ブ王にいひけるは幾何あるともね夕はく日汝れ神エホバ民を百
 倍に増たまへ而して王わが主れ目ろれを視るにいたれ然りと
 いへども王わが主の此事を恨ひたまふ何故やとヨアブと王
 の言ヨアブと軍長等に勝ければヨアブと軍長等王の前を退きて
 イスラエル民を核へに往りエラレちヨルダンを濟りアロエル
 より即ち河に中の邑より始めてガリにいたりヤセルにいたりホ
 ギレアデにいたりタテムホデレ地おいたり又ダニヤンおいた
 りてシヤンお旋りセまたツロの城にいたりヒビ人どカナン人の
 諸の邑にいたりヨダの南に出てベエルシバにいたれりハ彼等國
 を徧く行めぐり九月と廿日を経てエルサレムお至りぬニヨアブ

人口の數を王に告たり即ちイスラエルに劍を抜く壯士八十萬あり
 き又ユダの人は五十萬ありきナゲビデ民の數を書し後其心自ら
 責む是においてダビデエホバといふ我ふれを爲して大に罪を犯
 したりねがはくハエホバよ僕の罪を除きたまへ我甚だ愚ある事
 を爲りどまダビデ朝興し時エホバの言ダビデの先見者ある預言
 者ガデを臨みて曰くま往てダビデの言ヘエホバ斯いふ我汝を三
 を示す汝其一を擇べ我其を汝に爲んどまガデダビデの計ふいた
 りみれに告てみれにいひけるハ汝の地に三年の饑饉いたらん
 或ハ汝敵を退れて三月其前に進んる或ハ爾の地に三日の疫病あ
 らん爾考へてわが如何ある答を我を遣ハせし者ふ爲べきを
 決めよまダビデガデにいひたるハ我大に苦しむ請ふ我等をして
 エホバの手を陷らしめよ其憐愍大るればあり我をして人の手
 陷らしむるあるれま是にわいてエホバ朝より集會の時まで疫病

をイスラエルに降したまふダンよりベエルシバまで我民の死る
 者七萬人ありま天の使其手をエルサレムに伸てこれを滅さんと
 したりしダエホバ此害惡を悔て民を滅す天使にいひたまひける
 と是り今汝れ手を住めよと時にエホバは使ハエブス人アラウナ
 の禾場の傍にありまダビデ民を撃つ天使を見し時エホバに申し
 ていひたるハ嗚呼我の罪を犯したり我は惡き事を爲たり然ども
 是等の羊群ハ何を爲たるや請ふ爾れ手を我と足が父の家に對た
 せよとま此日ガデダビデ所ふいたりてわれわいひけるハ上り
 てエブス人アラウナの禾場にてエホバに壇を建よまダビデガデ
 の言を聽ひエホバの命じたまひしごどくのばれりまアラウナ觀
 望て王と其臣僕の己の方ハ進み來るを見アラウナ出て王にまへ
 に地に伏て拜せりまらくてアラウナにいひけるハ何に因てり王且
 が主侯の所ふきませるやダビデにいひけるは汝より禾場を買ひと

リエホバに壇を築きて民お降る災をどいめんどてありアラウナ
 ダビテおいひけるのねがのく王はダビテ主其目お善と見ゆるもの
 を取て献たまへ燔祭おの牛あり薪おの打禾車と牛の器ありと
 アラウナおれを悉く王に奉呈々アラウナ又王にねがはくの爾の
 神エホバ爾を受納たまへんことをといふ言王アラウナにいひけ
 るの斯すべうらす我必ず値をはらひて爾より買とらん我費る
 しに燔祭をわが神エホバお獻ぐるみとをせしむダビテ銀五十レ
 ケルふて禾場と牛を買とれりダビテ其處おてエホバお壇を築
 き燔祭と酬恩祭を獻げたり是においてエホバ其地のためお祈禱
 を聽たまひて災のイスラエルに降ること止りぬ

95-91128

DEC 20 1947

